

主幹・麻生路郎

川柳新誌

十月號



第五卷
第十號

昭和三年十月一日發行
每月一回
（昭和三年十月一日發行）

川柳雜誌

第五卷第十號

川柳雜誌社發行

十月例会

日時 十月六日午後六時半

場所 南區日本橋一丁目交叉點北

の辻東入 日本橋俱樂部

▼兼題 「驛夫三句

▼會費 三十錢

初心者の來會を大いに歓迎す

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため
全國各府縣に支部を増設いたします、
柳界のため且又「川柳雜誌」のために眞
面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜
誌」の擴張運動を援助してやらうとい
ふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望
の旨を申込まれたい、

川柳雜誌 第五卷第十號 目次

感想・評論

ベースボールの歌
句境と交響的表現
漱石と子規擲牛
弱筆飛沫
川村花菱
川上三太郎
長野吉高
住田胤耽

研究・其他

生業の古川柳(五)
秋の高野行
其象兄を悼む
桃哉兄逝く
月評
古句質疑
蛭子省二
高見柳骨
庄萬よし
安西杏三
山川白蝶
山路紋素太
山雨樓素人
蛭子省二

一路集

(募集句)

卵 墓 空 瓶
柳珍堂 忌
川柳家戸籍調
各地柳壇
栗の秋(表紙)
字
村田周魚選
福田山雨樓選
松丘町二共選
横田眠聲
橋本二柳子記
安井ひろし
柴谷柴舟
小出檜重

御禮とお詫び
編輯後記

創作

川柳塔
龜井花童子
矢田冷刀
川合舟々
三好革郎
岩崎柳路
橋本二柳子
岩本素人
高橋かほろ
松盛琴人
横田眠聲
庄萬よし
中野新陽
朝田翠峯
嶋田鐵洲
中澤濁水
水田黃彩
住田亂耽
粒々集
相元紋太
長崎柳秀
近作柳樽
中見光路
石川双葉子
松丘町二
水谷鮎美
安西杏三
楊井二南
森田笑太郎
富士野鞍馬
柴谷柴舟
諸家

路那・生
革那・二柳子



墓經の和尙しつこい蚊に困り
親切のうちにも慾を忘れずに
これしきの落度に友は馘首になり

亡き姉を想ふ

アルバムのこんな所に姉が居る
洋服へ叔母の挨拶にかしこまり

病氣辭職

待つてたとばかり舊主は骨拾ひ

本箱は出来たが本はこんな本

吸殻を投げて汽船の速さ知る

音信では一人前のことを書き

郊外に住んで言葉も變つて來

今時の娘を語る涼み臺

恩給のつくまで馬鹿で通したり

白山登山(二句)

御來迎拜むその掌もかじけて居

翌朝は忘れるほごの悟りやう

木賃宿みんなふりむく錢の音

三笠山にて

のほる子の母をうつかり見失なひ

這ふて來て届くま直ぐに遠くされ

情死のあつたを知らぬ次の汽車

借電話聞かしたくない詫びがあり

梳髪が似合つてさかく病ひがち

鳥取

萩同

松

福岡

郷同

川

同 姫島

同 觀同

同 月

同 西宮

同 南同

同 窓

同 大 阪

同 凡同

同 平

大 同 石川

大 同 錦

大 同 水

大 同 同

大 同 南同

大 同 天

大 同 同 阪

大 同 伴同

大 同 内



もし貴郎ほんごに口はありまして
 相談に兄はまたち若すぎで
 飲みもすりや吸ひもするよご丙種なり
 百姓の姿とうさき旭が昇る
 遺書にては生活難さ思はれず
 絹日傘のくるりと舞ふてすれ違ひ
 職業を明かさず適齡歸つて來
 二階借何には無くも狭う寝る
 手紙きてめがねもあてずしがめ面
 もう一寸寝ておくれよの忙がしめさ
 犬の喰ふ飯を乞食の子が見てる
 洋館にふさはし飯の名の犬が居る
 書置にあて字のあるも哀れなり
 おかしさは俺にも飯が焚けて居る
 告白を見事に書いてさらして居る
 キログラムになつてお米の値を知らず
 お手のものなのにお米の値を知らず
 撒水車フェルトへ迄は氣がつかず
 やけくそで貯金の残りみんな出
 針仕事めがねに頼る母を見
 規さとり小供は蟹を追ひかける
 永くとも不治では無いいたはられ
 終生の死を鑄型の中で草疲れる
 不慮の死を因縁づくにしてしまひ
 ジャズバンドに足元の浮く若さなり
 心なき人形の眼の透き通り
 初島田さて氣がりの床につき
 せつせつせつ小金を貯めた骸です
 爪剪らぬこみが叱言のはじめなり

福長山金大兵神同大盤同同大尼平大杭鞍同大和長大長尼滋山同神池
 岡春梨澤阪庫戸 阪池 阪崎塚阪瀬山 阪山阪野崎賀口 戸田

柴東一好瓢香重一洗葛草佳源風美廻虛可幸正黃柳高吟武清鐵一北
 庵狂霞陽之智天
 坊子笑次樓行子舟々西介風坊鈴坊堂生樂泉敏紙人峯女 流庵始城



句境と交響的表現

……(或る日三人連句のこゝ)……

川上三太郎

Aミジこはである。

六つの眼の玉がバツミ開いてその持主の魂へいちい、朝の空気を吹き込んだ。三人はむづくり起上つて風呂場へ立つた。こゝ志保原の十二疊敷、蓮のあけほの——のそのほのくこした或る時である。

座敷が桐の間に變つて三人が端座したその膝の前に晩茶の香が高い。

『いゝ天氣だね』。

『うん』。

話は何時か誹諧の上に落ちた。

三時間許り酒盃を手にして居る中、三人は何時か同じ句境に入つて居た。

『此の氣持の儘で句をつくらうぢやないか』。
『よからう』。

Aが發句をする事になつた。彼はちつミ疊の上へ眼を這らせた。そこにはヴェニス製の果物を入れる玻璃器があつた。それへ陽が七彩に破れて——靜かだ。彼はフト午後二時頃の太陽の光線に此の精巧にして高雅なるヴェニス製の玻璃器を想ひ浮べた。そこで筆を採つた。

ギャマンの切子に映る晝下り

○ 此の午後二時頃の太陽の光線はまた或る病院の長く續いた塀を想はせた。そこは藥の香の高い肺病院でなくてはならぬ。直にワキをつけた。

ケレオソートの匂ふからたち

○ からのちの塀の一筋は、何時も同じ景色に空気が調和を保つてゐる。下町のさびれた一路——第三句である。

○ 古り住んで朝な夕な溝の色

誰か住み馴れた我が庭に深い愛着を感じない者があらうか。冬にすつかり見すほらしく瘦浪人のやうになつて居た庭も、春から初夏へかけての新鮮さよ。それは極めて有りふれた小さな庭ではあるけれども——。

○ 五月の庭の月を忘れる

○ 初夏の新鮮さ、よろしさはそのいへとりこ落つたところにある。そこには彼の女が重たけに結つた鬘が濡れてゐる。彼の女は翡翠が好きだ。また白金が好きだ。さうして弱い。さうすみといふのやうだ。

○ 遠出髻青葉に染まるころもち

○ その丸髻も或る時は洗ひ髪すのらり、立つて、帳場の外から筆を借り、さういふ暫く振りで實家へ音便——常々心に相かけながらついで御無沙汰許り、甘へて御許しのみ願ひ上げ参らせそろう。

○ 亭主に似せる女房の筆

○ その女房の筆が何時かペンに變つて、丸髻が七三の耳隠し、たまぐの日晒を外へも出ず、新婚の夫婦揃つて讀書デー。けふ許りはチヨツキを離れた薄手の金時計が机の上で眼を細くしながらトグロを捲いてチクタクミ刻んで居る。

○ 或る時は音一つせぬ新世帯

○ まだ道具もロクに揃はない家の持ちちたて、ガタついて居るが新しい下駄箱がイヤに眼につく、此の家の主人公、甲種合格の立派な體格。何處やらに上等兵の匂ひが残つて居るのも微笑まれる。然しそれも餘程注意して見ればこそで、會社でも今では新参組の中では中古の方。だんぐ課長に下ける頭も低くなつてゆく——。

○ 除隊の靴の微びる下駄箱

○ 彼は下駄箱を中心にして或る家を畫いた。いんこしたしいもたやのやうな家を。するこそこほつりこ赤い常夏の花が浮んだのである。彼はさいらく、三筆を執つた。

○ 常夏の花にも見ゆる暮し向き

○ そこにはいろ／＼の花が咲いて居る。華やかな花、淋しい花、愛らしい花、浮氣な花。されどもよい。またきれもよい。主人は立ち上つて尻端折り、片手に柄杓を持つて水を打つた。庭の色。もう日が暮れかけて——銀月が細い。

○ 水打つほぎの目を餘しけり

○ 日が暮れて御神燈がさんらんとする。元よりおもてへもすつかり水が打つてすぶ濡れになつてゐるのだ。切火、いまほぎ、雛妓の袂が五寸許り長くなる。いゝ子になつたね、いわ、まだからきし子供なんです。姐さんちよいこ。なあに、あゝいゝよもう出掛けるのかね。稼業ですもの。此の帯、死んだ姉さんがそりや好きだつた帯。いけない、出掛けにそんな事を言ひ出しちやあ。濟みません。

○ これやこの襟足で、賣る一ト盛り

○ もう唄は止めだ。倦きたね。おらあ眠いよ。胃が悪いんだぜ莫迦野郎。これ紳士です。兎に角此の蛙の聲が。晝間は紡績の笛なる。然し此の達磨の煙草盆も古いね。達磨も古いが煙草盆も古いよ。向島は何うもビードロのやうな遊びだ。お客の心が透いて見へるか。やい氣分を言ふんだぞ。シンカンカクテキでがすかね。はつくしよ、はつくしよ、はアつくしよい！

○ 隅田の春のみんな風邪ひく

○ その隅田の川沿ひに月が一筋、臙銀がにふい。彼の眼に三尺許りの童子がうづくまつてゐるのである。K A P P A ! やつ何うしたんだらう。心細く丸くなつて、あれぢや夢もろくに見られまい。河童も景氣が悪いのかな。然し静かな夜ではある。月の光の落下する音がする。さうだ。月光の碎ける音だ。

○ 河郎の夢も流れんおほろ月

○ 河童が一匹、二匹、三匹、おや運動をしてゐる。いや退屈をして欠伸をしてゐる。雨が降つてゐるからだな。その幾筋もの川。橋。本當に深川だ。本場だ。こゝにもしづかさが……たゞよふ。

橋ばかりなる雨の深川

わつしよい、わつしよい、べらほうめ！深川ッ子だあ、雨な
ンかにビク／＼して何うする。祭りに覺の上なんか坐つてゐ
るやつは病人か學校り先生だ。しつかりしろ。だがさうも祭の
あきてエものは氣落ちがしてね。やがて盂蘭盆だ。そろ／＼仕
事に身を入れなくつちやあね。親方が苦い顔をするつてエもの
さ。これ、あんまり餓鬼を泣かせるなよ。

お祭が濟むこそろ／＼棚を吊り

暑い夏へ何時か秋が浸み込んで居る。やがて暴風雨だ。篠を
つく大雨。狂風一夜は漆を塗り籠めたやうに、屋根も瓦も、草
も木も、身も心も消し飛んだ。なんて小さな人間だ。いやさう
ぢやない、何て人間なんて小さなやつだ。轟々／＼轟々。君よ、
君は大暴風雨中の海の表面を岸の上から見た事があるか。然も
その暴風狂雨の、或る時はほつ息をつく事を知つて居るか、
君よ、君の心よ。

嵐の底にこうろぎを聞く

AとJとSの手からばつたり筆が落ちた。Jがもう一度それ
を吟誦した。三人のその日が終つたのである。

ギヤマンの切子に映る晝さがり 雨吉

ケレオソートの匂ふからたち 雀郎

古り住んで朝な夕なな溝の色 同

五月の庭の月を忘れる 同

遠出鬻青葉に染まるこゝろもち 雨吉

亭主に似せる女房の筆 雀郎

或る時は音一つせぬ新世帯 同

除障の靴の黴びる下駄箱 三太郎

常夏の花にも見へる暮し向き 雀郎

水打つほぎの日を餘しけり 同

これやこの襟足で賣る一ト盛り 三太郎

隅田の春のみんな風邪ひく 雀郎

河郎の夢も流れんおほろ月 同

橋ばかりなる雨の深川 雨吉

お祭りが濟むとそろ／＼棚を吊り 雀郎

嵐の底にこうろぎを聞く 同

(北海道)で麻生氏と密々話をした時、二三箇月静養するから、君
僕の代理に何か書け——と路郎氏から言はれた。僕には到底路郎
氏の代理をする資格はないが留守番なら出来ると思つた。さうし
て悪友雀郎、雨吉をおだて上げて、今月は三人で留守番をした。
即ち以上の通りである(三太郎)

川柳書架 (三)

新興川柳論

田中五呂八著

へ著者の「自序」から抜く

この論集は、大正十二年以後における私の思索過程である。ことに、一面において新舊川柳の鬭争史であり、新興川柳の發達史でもある。

凡そ、川柳は軽視されて來た文學は無いらう。ひびきのなるに、川柳とは「床屋文學であり落語の仲間である」くらいに評價されてゐたのが、既成川柳に對する一般の概念であつた。そして、私も始めは古い川柳に入門し、古い川柳の本質を極め、古い川柳が一個の人間を生かすに足らないことを覺つて、數年前から評論を書きだしたのが、積り積つてこの一書を成したのである。(中略)若しそれ、新興川柳の創造意欲が、既成短詩觀をも否定して、どんな處女地に進み

あるかを知つて貰へるなら、この未熟な論集を世に出す目的も自ら達しられるわけだ。

△昭和三年九月三日發行、四六版三三〇頁、定價一圓二十錢、發行所小樽市稻穂

町東一丁目七番地川柳氷原社

△書架子は神經衰弱で悩んでゐるので、折角の好著を讀み返す力がない、が然し目次に依つて見るとかつて「氷原」其他の雑誌で殆んど一讀したもので、中にはなかく、金玉の文字もあり、著者の頭の良さに敬服してゐたものである。所謂既成川柳に物足りなさを感じてゐられる方は是非一讀されたいものである。

△著者田中五呂八氏は新興川柳派の重鎮である

ゆうもあ (創刊號)

生方敏郎編輯

△「ユーモリスト」がいつの間にか消へて、「ゆうもあ」が出た。例に依つて社長兼小使は自他共に容す日本一のユーモリスト生方敏郎先生である。内容は一々説明するまでもなからう。下手な金儲けに

頭を悩ますより「ゆうもあ」の一冊を靜かに一讀してゐる方が人間らしくなれると云ふもの進んで購讀されたし敢て薦む。

△本誌と川柳とは直接關係はないが、伯父御ぐらゐの間柄であるから、特に此の書架に掲げた譯である。

△定價一冊三十錢、發行所東京野方町下沼袋一六〇七ゆもりすと社

川柳女性壹萬句

近藤飴ン坊編

△昭和三年九月十五日發行、横四六版、定價一圓三十錢、發行所東京市日本橋區鐵砲町六番地磯部甲陽堂

△型から裝幀から三太郎氏の新川柳一萬句集と同じ行き方で、ミこころく句評が入つてゐるのが本句集の特長の一つである。「川柳女性一萬句」もあるけれど、女性の作品ではなく、女性の境地を詠んだ句を集めたものである。秋の夜長に寢轉んで美しい人達を夢見るには好適の書である。



ベースボールの歌

川村花菱

この頃岡本の『子規集』をよんで居る。その中に野球の事について詳細な説明をして居る事を此間三太郎にはなした。ルもやり方も現代のそれと大した差はないが、使用の文字に却つて今よりも感じの面白いものがある。今日の遊撃を『短遮』云ふのも私にはいゝと思はれる。成程その仕事から云へば遊撃云ふ事も適當な文字であるが、F. H. Stone云ふ文字から立場から『短遮』云ふのが氣に入つた。今日の第一壘第二壘云ふを第一基第二基とある。此のベースの事を説明して、走者がベースについて居て安全である事を『鬼事のをかの如し』云ふ所に私は云ひ得て妙だと思ふ。

此の感想は明治廿九年七月の筆になつたもので、いかに正格に此の球戯を理解されてゐたか驚くべきものがある。ベースボ

ールの譯語いまだなし、『君子幸に正を賜へ』云つてあるが、當時これ以上の正はないと思ふ。

明治三十一年に、『ベースボールの歌』云ふのが九ツある

○九ツの人九ツの場を占めてベースボールは始まらん

○若人のすなる遊びはさはにあれどベースボールに如く者もあらじ
○打ちはず球キヤツチャーの手に在りてベースを人の行きがてにする

○今やかの三ツのベースに人滿ちてそゞろに胸のうちさわぐかな

○なかくに打ち揚げたるはあやふかり草行く球のさゞまじなくに
歌としての價値を私は茲に云々したくない。只いかに當時『子規』が、此の野球を好いて居たか窺はれ、夜叉郎がかつてこれに夢中であつた事を思ひ出して暗然として仕舞ふのだ。子規も夜叉郎も同じ病氣で、同じ苦しみをなめつくして死んだ。

此の俳人、此の川柳詩人、何年も腰が立たずに居て、しきりに野球見物を望んで居たのがたまらなく淋しい。それでも夜叉郎は、私等と度々野球見物に行つた。そして、進んだ妙技の數々をも見た。此の二人に、今日神宮球場を見せたらばさんな

夜叉郎の句帳からベースボールの句を少しぬいて見る。

電車から野球場までのもごかしさ
大毎の野球部が来て春になり
野球部は賣約濟で卒業し
あれでいけなきとスタンド笑はせる
ホームラン球の行衛に晝の月
三度振地面を見つめながら来る

御禮とお詫び

路 郎

人間四十一、これからであると思つて
ある僕も、去年はチブで殆んど死にか
かり、本年の二月には大腸加答兒で、自
ら起つたはざるを思ひ、同志に川柳雜
誌の將來について語る程の弱り方であつ
たがいつの程にか出勤が出来るまでにな

三振のベンチ黙つて席を明け
しくじつた遊撃何やら云いは云ひ
MEMBERによれば外野に兄が居る
友達の間だからかも知れないが、みんな面白い。みんな立派
な句になつて居る。近頃見る野球の句なきから見るといづれも
粒齋り云つてもいゝ。だれでも野球を見、それをたのしみ、
それを感じて居るのだ。けれど出来た句はみないけない。それ
はやつぱり本當に見つめ、本當に寫生してないからだと思ふ。
フワウルにうねるスタンドの波

私は、此の光景を句にし度い三四五年間考へて居るが、さう
しても句にならない。見る、感じる、表現する、そこに吾々の
苦しみがあつたと思ふ。

つてゐたが亡きロンドンの一周忌ころか

出来ました。

ら憂鬱性に陥り、遂に強度の神經衰弱と
なり、俗務の壓倒と過度の讀書と自己の
藝術觀の煩悶から自己の生存をさへ否定
するまでの心境に到達した。たま／＼花
童子氏から來遊せよやこの手紙を入手
し、何等顧慮する餘地なく、漂然として旅
に出てしまつた。しかし偶然な出來事と
先輩の厚情と花童子氏の寸隙なき注意に
よつて、再びごども達の顔を見るこゝが

あこがれの北海の地で多くの柳友にい
る／＼と御迷惑をかけました。いづれ印
象記をばつ／＼かくつもりです。が、醫
者から筆を採ること、讀書することを禁
じられてゐます。好きな酒や煙草にさへ
遂々別れを告げました。北海道の柳友諸
氏への御禮と各地柳友諸氏からの御見舞
狀に對し御返辭もさしあげぬお詫びを併
せて申し上げます。



川柳塔

龜井花童子

○ 小巡禮歩き疲れて虫と寝る
せめてもの來世は繼母でない願ひ
美しいものに貞女の瘦せを見る
煎餅の音に一人は寒う居る

○ 岩本素人

小頭が笑へば金の總入齒
耳打ちをしたは與黨の智恵袋
限りある命を喧嘩して暮し
祇園町に豆腐屋がある京らしさ

錢やつてきまりの悪い思ひする
アツバツバ着て下駄履いてよくしゃべり

○ 矢田冷刀

無智を哀れみ飯をふるまふ
夜の美に假面を脱がぬ人々や
旅に居て古下駄に似る戀をする
渦を巻く波生活に似てゐらし

○ 高橋かほる

秋晴の鏡屋反射さして行き
身二つに成つておならをよく落し
子の寢顔酒の肴になつてくれ

○ 川合 舟々

溺れようきて近寄りしにはあらじ
父に續いて思人の敷居
良いところばかり目につく許嫁

○ 松盛 琴人

あの魅力なき心に思つてる
見倒しがきくこは情けない男

○ 三好 革郎

鳴いてゐるこほろぎの身の肢一つ

○ 横田 眠聲

心にもない嘘をいふのも義理の仲
碁敵を訪へば摺餌に餘念なし

○ 岩崎 柳路

金魚鉢猫が坐つて景となり
埃及の研究をして病んでゐる
失禮な方ねと女給横を向き

○ 庄 萬よし

圖畫だけは十點にして拗ねる癖

軒店の創業板を敷いて寝る

○ 橋本 二柳子

四ツ手網あけたばかりに人が立ち
籐椅子で父をまねるミ屋根ばかり

◇ 中野 柳陽

満足の笑ひ双手をあふれ出で
カサコソミ落葉過去をつみかさね

◇ 中見 光路

秋晴れに我子の聲が扉を越し
褒められてつひ凡人の型になり
散髪の性は善なる顔にして

◇ 朝田 新水

時を経て我が癩癩をおかしがり
父少し骨相術を覚えて來
日當りの好い駄菓子屋へ子守行き

◇ 石川 双葉子

酒吞まぬ人を罵しる哀れさよ

癒へがたき病に書いた自叙傳か
ヤツチヨロになつて社長の眼が眩み

◇ 島田 翠峯

刀屋が隣りに出來て秋近し
姉婚にまるめられてる父と母

◇ 松丘 町二

食卓の艶へ微笑が映りたり
新涼が隠居の髯を流れけり

◇ 中島 鐵洲

袖たけの合ふたを見るも心地よし
銀行で内儀ひたすら叩頭する

◇ 水谷 鮎美

秋の籠もう一匹のきりぎりす
醜男ののろけ煙管がつまるなり
母とゆく子供可愛いヘルメツト

◇ 中澤 濁水

診察を乞ふスリツバを履きそこね

染め直し伯母の所へ見せに寄り
轉校の二人やつぱり戀ミ知れ
誰のミも言はず笑つて縫ひつゞけ

◇ 安西 杏三

仰向いて何を叫ばん秋の空
看病の妻の白粉厚すぎる
金持の親類ミか眞直ぐ歸り

◇ 水田 黄彩

幻滅のひそむ壺とは知らずして
尊くも亦おろかしき母の愛
茶柱にからりミ晴れた旅の朝

◇ 楊井 二南

朝顔を見詰めて居れば敵もなし
打消して笑ふ力を藝者持ち

甲子園にて

指定席慌てる色もなかりけり

◇ 住田 亂 耽

夢を拾ひに電車に乗つたが
利己主義の手に握られし藏の鍵
日曜の父なぐさみの風呂をたき
頭の中で女の像を作り上げ
情婦も入れて花札の音
夕立の上つた濱でめぐり合ひ

高野山にて

高野豆腐に戀を忘れし膳につく

◇ 森田 笑 太郎

十錢の穴からのぞく隣の子

粒々集

神戸 相元 紋 太

瓦斯タンク夕陽をうけてあぶらざり
いさも肥ねたる身体恐ろし
細長い町のうしろに川があり
胃を洗ふ話のうちに瘦せが見ぬ

塗り薬ちよきんミ切つた筆をつけ
泣かすのか泣くのか子守見詰められ
子の話するなミ二人ほけてゐる

東京 富士野鞍馬

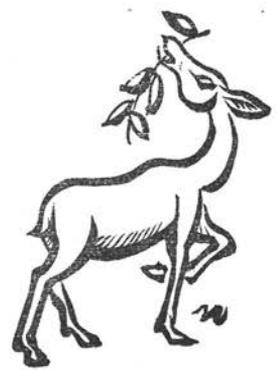
渡御へ背の低いのはあきらめる
女が何人通つなミ守衛ひま
内職の事も書いてる綴方

御影 長崎 柳 秀

醫者なれば喰ひはぐれなき無いさうな
膝切りの水にはしやぐ女の子
卵でもかけて置かうミ妻の留守
眠る子を母はさけそな目で眺め
空瓶がだんく殖へて秋になり
別嬪をあだつほくする貸浴衣
自炊ならたべて歸れミ勧められ

魚崎 柴谷 柴舟

子が寝ればやはり秋なり虫の聲
ビスケツトかけらを口へ入れてやり



川柳塔 素人提出

ハンカチを首に捲いてる啞の戀

白 鷗

素人……僕は非常に此句に惹付けられた。或時松郎君に此句を佳句として推稱したところ、松郎君は「そんなに佳句ではない、君は何の思ひ遣ひをして、買かぶつてゐるのではないか。」と言はれたので、考へ直して見たが、そう言はれた爲めに思ひ直すことがどうして出来ない。僕が少し巧く繪が描ければ、描いて見たいと思ふほど、アリ／＼と人物が目の前にチラつくやうな氣がする。

月評 [前號]

路郎 紋太
山雨樓 素人

路郎……僕は悲痛な句だと思ふ。山雨樓……この戀さいふのは何を意味するのですか、思春期に入つてゐるさいふのですか。又は戀の對照があるさいふのですか。

素人……無論對照即ち戀人があるのですが、その戀は幸福な戀でない。「啞の戀」に「ハンカチを首に捲いてる」といふことが、びつたりと一分の隙もなく一如になつてゐる。

山雨樓……僕には察しがつかないのか、どうもびつたりさこない。疑問の句として、何を附けてゐた句です。

路郎……僕はこの場合にハンカチがよく効いてゐると思ふ。

素人……言ひたいことが、澤山あるが説明するさ句の氣分をこわして了ふので言へない何か、こゝろ巧く言ひ表はす言葉が無いかな。路郎……説明をすれば芝居染みてくる。さう取らずに句をその儘に觀賞すれば、可成り悲

痛な氣持の浸み出た句だと思ふ。

素人……詩さして成功した句だと思ふ。山雨樓……句調の上で、下五がびつたりさこない關係かもしれぬが、固い感じがする。例へば「ハンカチを首巻にして啞の戀」さいふ風にすればさと思ふが、それでもいけない。

素人……「首巻に」ではいけない、調子の上でも軟か味の無い所が寧ろふさはしいと思ふ。山雨樓……ごうも、一へ僕にはよく分り兼ねます。紋太さん如何です。

紋太……それは出来ない様な句の心持が十分には味はゆる。「啞の戀」さいふ言葉が、つまりハツキリ言つてあるやうで、無い様なところに物足りないさを感じられるのであらうが、啞の戀の對照が戀人であらうが、誰さきまつた戀人がなく臆る氣に戀を感じてゐるさ云ふ、はかない氣持を表はす角に「ハンカチを首に捲いて」とした表現法は巧みである。其

場の光景が躍如として出てゐる佳句と思ふ。路郎……「啞の戀」と響る固く云つたところが真い。

紋太……野趣がありますね。

山雨樓……あゝさうですか。

素人……昔のハイイタものなモダンボーイはハンカチを首に捲いたもので、芝翫巻さ云つて流行つたことがありますが、ハンカチを首に捲くさいふ事は啞にすれば流行を追つた装身のつもりなんです。

山雨樓……成程さうですか、それでよく分りました。

路郎……今でも田舎へ行けば、さうした風習が残つてゐるさころがありますね。

素人……田舎の若い衆が、ハンカチを首に捲いて日暮れ時から女の許へ遊びに出掛けるのを見て、啞が眞似をしたのであつて、啞が咽喉を聯想して此句を考へたら、プチこわしです。

紋太……啞でも人並に戀もすれば、人並の身なりをしやうとするさころに野趣が溢れ涙が浸じむ句です。

近作柳樓 山由樓提出

夕刊を買ふて此の子と同ひ年

石 竹

山由樓……よく有る想だと思ふが、夕刊を買ふ慌々しい瞬間に、こゝした感情を喚起すことは純情の表はれだと思ふ。こゝいつた心境そのものが人間として尊いのである。その感じを受取るこそが出来る。

路郎……此句は此作家として、寧ろ失敗の句である。山由樓氏が最初に言はれたやうに有觸れた句だと言ふ言葉が適切であるが、しかして近來此作家は、真い傾向に向つてゐて全く人間をはなれて、人間を見てゐるさ云つた態度の句が随分出て來てゐるが、此句は餘り「普通な言ひ方をしてゐる。此處に並んでゐる句で言へば」

社へ出てく振りして相場はつてゐる

の輕いがちや

乳のはる夢からさめて千をささす

の人情味の句の方がより優れた所がありはしないかと思ふ。

紋太……こんな場合もあるであらう、然し此句の表現の仕方から受取れる感じは、無理にこゝいふ氣持を拵へ上げたさしか思へない。題詠であつたら、こゝいふ場合を思ひついた句までと面白く感じられる場合も有るかも知れぬが、此句を一句だけ見てゐるさ、どうもワザささういふ氣分を作り上げたと思はれてならん。

山由樓……その氣分は寧ろ此句を讀む者の感じて作者がこゝいふ事を表はさうと思つて考へ出した、さいつた様な跡は、受取れぬと思ふ。

紋太……少し空々しいやうな氣分を感じる。つまり自分が夕刊を買つて、こゝいふ考へを起したさといふのにしては、餘りに熱が無く、よそ／＼しい言ひ方だと思ふ。

素人……僕は同ひ年と断定したさころが、面白味が無いと思ふ。同ひ年ぐらいだらうさいふ意味だと思ふが、同ひ年と言ひ切つてゐる爲めに、夕刊賣の年を始めから知つてゐる様に思はれて變だ。もう一度考へ直したら佳い句になりは、ないかと思はれる。

山由樓 僕は川柳を始めた時分に「苦樂」さいふ雑誌が「新聞」さいふ題で川柳を募集したのに應募し

夕刊を賣る子の聲に錆がつき

さいふ句を投句し、入選したさがある。此場合その拙句を思ひ合してその句が所謂作

り上げたうがち(その實その句は實感句であつたのであるが、に止つてゐるのに反して、「此の子と同ひ年」さ言つて年齢さか、或は軀の格好さか言ふものによつて、自分の子を聯想したさいふさころに言ひ知れぬ愛がこもつてゐると思はれるのである、此の餘りに忙しい世の中で夕刊を賣つてゐる子供を見る時に、同情の涙惜しまない詩人は、自分の子見たいな子供を見る時に、こゝした感慨を起し、聯想に耽らすにはあられないうさ思ふ。僕は何處までも實感の句さして味はつてゐるのです。

紋太……こゝいふ場合を句にするさことは、ちつとも差支へないと思ふが、此の表現の仕方が少し拙いと思ふ。さういふ具合に悪いのかはつきり言へないが……。

素人……下五の「同ひ年」が變なのぢやないですか。

山由樓……然し下五に「同ひ年」さ言つた言葉は「同ひ年」さいふことが中心で、他に何等の批判を加へる餘地さへ與へず、それからそれへさ、此の句から聯想されるものがある。

「同ひ年」を中心として見るさきに始めて作者の感じを一層多く汲みさるることが出来る。穴勝ち断定し過ぎたさいふ見方ばかりも出來ないだらうと思はれる。

紋太……こゝいふ場合は、夕刊賣の子供が自分の子供さ同ひ年ださ感じる。その感じは利那的でもつさ、ばつさ感じるやうな感じ方だと思ふ。それに此句はそれをだら／＼叙し

であるから、そこで空々しい様な感じが起るのである。つまり私は「想」を悪く言ふのでは無く、表現の仕方が拙いと思ふのである。路耶……丁度新派劇などで、悲しい場面を出さうとして、よく子供の夕刊賣りを使つたり破れ障子を見せたりするのと同じで、それだけの感激なくして生れた句や作爲の跡がのこつてあるやうな句が、名作さならないのは是非もない次第であるが、多少捨てがたいところもあつたので採つた句である。嚴密に言へば新味がかけてあると云はねばなるまい。山雨樓……川柳には往々にして或る「目的意識」の爲めに所謂句を作るさういふ傾向があるが、實感から生れた自分の純情を歌ふ時にはさういつた目的を果す爲めの「目的意識」が無い方が句としてより多くの深味が有る様に思ふ。この第一句

社へ出てく振りして相寄はつてゐる
にしても或は實感ではあるでせうが、何かそこに皮肉つてゐると言つた様な意識が附纏つてゐる様に思ふ
兎に角、純情から生れた素直な句だと思ふ然し表現に就いては或は註文しなければならぬかも知れぬが、素直な氣分を重んじるといふ點で、此句の態度は自分は感心してゐる素人……まア言はば表現不十分ですれ。路耶……月並な句、平凡な句としての多少の非難はまぬがれまい。作者の一考を煩はした山雨樓……川柳に熟練してくると、聯想力が

旺盛になつて来て、これも彼の句の境地だといふ見方は從來言ひ古され来た見方だといふ風に、有觸れた句さういふ先入主が先に立つて句が平凡に見ゆるもつたと思ふ、然しも一度振りかへつて見る時は、その平凡の中に偉大なものがあることが往々ある。

路耶……僕も意味を異にして、平凡や月並を愛するが句の内容さしての平凡や月並には飽き／＼してゐる。「月が出た」と言へば平凡に聞こゆるが、山の端から真如の月がぬつこ顔を出した時のあの莊嚴さ、あの清淨さが、持つ偉大なる力には誰でも打たれるであらう。が然しそれを繪に描き、詩にして歌はうとする時、果してその偉大さが十二分に表はし得られるであらうか、それがカンパスや紙の上にも再現されて實感が、或程度まで溢れてゐるさしても、自然に月が出る時のあの莊嚴味をその儘に出し切るさ云ふことは「至難の業である。それを誰も彼もが美しい」「月が出た」と平凡に叙して了つたのではどうであらう。作者の實感はどうであらうとも月並として棄てなければなるまい。

近作柳樽 紋太提出
友の計は俺の一生をちとけづり

兎 卓

紋太……今の夕刊賣りの句を表現が、拙いと言つたが、此の句も同じく表現は實に拙いと言ひ始めは思つたが、同じく拙くてたゞ説明に過ぎないだけの言ひ方をしてゐるが、よく見てゐるさその拙い言ひ方がだん／＼僕を惹付

けて来た、そして巧いさは矢張り思へないけれど、さうも動かぬ様のない、これよりも仕方ない句だと思ふのです。

素人……矢張り前の句と同じ様に思はれる。言つてゐることはよく分るが、追つて來ない字の意味はよく分らないが、「計」と云ふ字「ち」と云ふ字が、障つてゐるのではないか、その爲に生命を縮めたさういふ事が、彼奴も死んだのか、今度俺の番かなアと云ふ風に理智的に感じられて、感情の上に、壽命が縮つたと云ふ實感が出てゐない、文字の使ひ方が悪いのぢやないかと思ふ。

紋太……素人さんはなかく／＼悪いところをうまく見付けますね。私などはこうぼんやり思つてゐても明瞭に何處が悪いと直ぐに指摘することが出さないのです、然し此句は悪いなりに生かして行きたい、勸諭にわたつての拙さは兎に角として、その心持を卒直に言つたところに許せるところがあると思ふ。つまり句さしての味は無いけれど捨てたくない。路耶……僕は内容の取扱方に於いて、前の夕刊賣りの句と同じであるさと言ひ得ないと思ふ。此句の方がより鋭い何物かを掴んでゐるさ言ふことが言へる。叙法の缺點に就ては素人君が指摘された様に「計」「ち」と言ふが矢張り大きな缺點をなしてゐる「俺の一生をちとけづり」とあるからには「計」といふやうな他人行儀な感じのする言葉を使はないで「死」といふ強い言葉を使つた方が適切ではないか「ち」と就ては今直ちに引締つた

言ひ方が考へ出せないから、たゞ之だけの事を申述べて置きます。

山雨樓……實感は表はれてゐるが、缺點の方が先に眼につく、それから前の夕刊賣りの句との對照に於いて、こゝいつた實感の表はれが、詩として第一義であるといふ算さざるを叫びたい。

技巧で生きてゐるさか、活躍してゐるさか言はれる句があるが、詩の藝術でさういつた巧さは寧ろ墮落だと思ふ。たゞ叙法なり、格律なりに於いて、無限の習練を伴ふことは無論必要であるが。

川柳塔 路郎提出

算盤づくめの兄となりけり

双葉子

路郎……「算盤づくめの兄となりけり」十四字詩です。イヤ十四字詩の型をとつてゐるが事實は十五字となつてゐる。然し此句は十四字詩の中に包含して、少くもあやしまれない程に十四字詩の型に嵌つてゐる。全然例の無い事もないが、斯うした表現法のある事の一つの参考になると思ふ。單純な言ひ方をしてゐるが、そこに何か複雑なものを含んでゐる。云ふ様な表現法は、僕の句に可成り多しと思ふ。それで此句が僕を惹付けたのかとも思ふ。此間の柳珍堂思の句會で某君から扇面に一人立てば風ふさころに入りけり

と云ふ僕の句を需められて揮毫した、勿論内容は違ふが、さういつた行き方の叙法に於いて

て共通點があると思ふ。

山雨樓……「想」はよく受取れるが、見方が單純なやうな感じがする。勿論此の句だけから兄の全豹を視ふさいふ事は無理であらうし間違つてゐるだらうが、簡単に算盤づくめと言つた言葉が、餘りによそ／＼しい様な感じを與へるのである。

此の十四字詩といつた所で、十四字詩に纏め得るさいふ事が、一つの句作上の快感を覺はさす爲めに、句に引摺られて行くさいふ様な傾向があるんではなからうかと思はれる。勿論十四字詩なり、五七五の短詩型で、強く、鋭く言ひ表はす事に、異論は無いが感じを壓搾する上に於いて、感じが主でなくして、不知不識の間に句に引摺られて行くさ云つた様な弊に陥ひる事は警しめなければならぬと思ふ。

紋太……今の山雨樓氏の御言葉を味はひ深く感じました。此句は感情が巧みに表現出來てゐると思ふ。こゝいつた「想」はよく誰しも普通に口にする所であるかも知れぬが、此の表現の仕方に依つて、作者の立場に惹付けられるものが表はれてゐると思ふ。

普通には川柳を云々する機に、句から面白さを求めようとする時には、或は少し當てが外れるかも知れませぬが……私の受取り方は兎に角作者に、十分の尊敬を拂つて止みません。先刻から琴人氏の

虫をころしてゐれば馬鹿にし

と云ふ句を見て居りますが、之も同じこそが

言へると思ふ。

素人……今まで違つて兄弟の情愛が無くなつたさいふやうな氣持がよく分る。双葉子君の年は三十四五、若くて二三ですか。

山雨樓……三十になつてゐませんよ、僕より若い筈です。

路郎……仕事は仕事だから年は若くても三十以上の思慮分別が出る人でせう。

素人……何れにしても双葉子君の兄さんの年は四十近いのだと思ふ。四十近くなつて世の中に採まれて來て、或る悟りを開いたさいふ氣持がよく見ゆる「算盤づくめ」さいふ事は「金づく」さいふ事ではないと思ふ。多分に勘定高いさいふ事が入つてゐることは入つてゐるが、それだけでなくもつと違ふ人生に對する見方をしてゐる四十位の人の氣持がよく出てゐると思ふ。

殊更に十四字詩を作るさいふことは、山雨樓氏の御説の如くに、弊害があるだらうが、こんなのは適當な手法だと思ふ。自分の少ない經驗から言つても、十四字を十七字にした爲めにダレたり悪くなつたりするも、十七字を無理に十四字に纏めた時に可笑しなものになつて了つたり、生半熟なものになる事は確である。要するに感情のまに／＼字を使つて行けば、大した弊害は無いと思ふ。双葉子君の句の中では近來の佳句の一つだと思ふ。

路郎……此句は案外突嗟に纏つた句だと思はれる。素人氏の言はれた如く「金」ばかりの

意味でないことは勿論である……。句が單純であることは事實だが、その中に複雑なものゝ盛られてゐると思ふ。兄は弟に對して「お前それでよいのか」といつた態度を事毎にこゝろ潮氣押々の弟にさつては、兄の此意外な變り方に押へきれない不平等が起る。こゝろに兄と弟との間に少しづつ溝が出来て来る。さういつた所が表はされてゐる無理に十七字にせず引締つて纏つた句となつてゐるさういふ點で此句に敬意を表したいと思ふ。

紋太……路郎氏の句と共通點があるさういふ事も確かに肯つける。僕はいつも路郎氏の句を見て（僕もさういふ氣持で句を作りたい）願つてゐるものであるが、それを強めて行くさ不知不識に俳趣味と同じ様な立場にて外れて行くのではないかと云ふ感じがするのである。

路郎……あなたで作られた句が、俳趣味になつてゆくと思はれるのです、それとも僕の句に俳趣味を感じる、さても言はれるのですか。僕自身では自分の句は決して俳趣味に動きつゝあるとは思つてはゐないんです。

紋太……句に表はれたそのものが、俳趣味だと言ふのではなく、句を作る態度に僕の思ふ俳趣味があると思ふ。川柳には何處さなにして獨りで物を感じたり、物を眺めたりするさういふ感じが薄く、俳句の方では、他の人間は居らずに、自分一人が存在してゐる様な心持で物を感じたり、物を見たりする様な氣持があ

ると思ふ。それで僕は詳しくは知らぬが、宛に角詩に近づくと、川柳が良くなると思ふけれど、それに近づかうと思ふれば、勢はひ今言つた孤立な心持に進まねばならぬ様な氣持がして私の好きな川柳の味はひに遠のく様な氣がして、そこに始終悔みを感じてゐるのである。

路郎……今のお話はよく分りました、つまり紋太さんの御意見では從來の川柳が主として客觀的に詠まれてゐる、それにも拘はらず僕の句には主觀的な句が多いさういふ所からさうした御意見が、生れたのであらうと思ひます。主觀句や主觀句かつた句さういふものは下手に作れば必ず自分にしか分らない句、所謂小主觀の句又はそれに近い句に墮り易い弊があるから、私も出来る限りその弊に陥らない様に十分氣をつけて、主觀の句や主觀句かつた句を發表してゐるのである。で自分の思想、自分の心の動き方、さういふものを詠んで、その中から第三者に共鳴して貰ひたい。しかもそれには人生に深く觸れるものがなければならぬさういふのが、私の句の行き方です。尤もその爲めに、私が客觀句を全然排してゐるのではないが、私の句には主觀の句が多い、そして興味中心の句が、減つた爲めに可成り作句数が減つて来た、之も止むを得ない事だと思つてゐる。拙吟を少し列べてさせて貰つて、私の説を補ひたい。昨年長男が亡くなつた時に（四巻四號）

おほきな事實　子が死んでゐる

學校の横に住みて
子を死なし學校に子の多いこゝろ
今年の一週忌に當つて（五巻三號）
お父さんはやはり　川柳々々云つて
るよ

それから八月號に（五巻八號）

子よ妻よ　ばらばらになれば淨土なり
戯れに死ねば　こゝろやすからん
わがまを　父　特權と思ひぬす
俺の子さういふのがあつておそろしく

さ云ふやうに句の表面から見れば、甚だ平淡な句であるけれど、自分の眞情を川柳の形式によつて表はした詩として、多少の深味を持つてゐる句だと考へてゐる。同時にそれらの句を讀んだ第三者が、直接又は間接に可成り親しみを持つて、それらの句を批評して下さつたことを考へるさ、決して第三者に自分が深く感じた事が、その儘傳はらないことは、決してないさういふ確信を持つてゐる。人生は誠に短かいのでその間にあつて、單に客觀的な穿ち句や寫生句ばかり詠んで、自分の心の動き方や自分の思想さ云ふものが、稀薄にしか傳へられないさういふ事は、詩としてどうか考へられる。それが、爲に私はさうした態度に歩み出しているもので、決して第三者に強いる譯でないが、私も同じ様な感じを呼び起された方があるならば、私も同じ道を歩いて頂きたいと思ふのである。

紋太氏の主張されてゐる客観句、殊に紋太氏の句に就いては常に敬服をして拜見して居りますが、私は先程から申しました様な意見の下に進んでゐるので、其の點を御諒解の上で、御批判なり或は難題なりをして頂きたいと思ひます。

素人 今のお話を聞いてゐて、三つの事が思ひ浮んで來ました(第一)は紋太氏は詩に近づけば云々と言はれたが、紋太氏は澤山な詩を作つて居られる。紋太氏は詩を餘りに狹義に解釋して居られるのではないかと思ふ。(第二)主觀がかつた句、客觀がかつた句は成り立たないと思ふ。句として相當なものであれば單なるスケッチと第三者から見ゆるものでも作者は可成りな興味を持つて見てゐる場合が少なくないと思ふ。(第三)人間が詩を作るのは發表せんが爲めに作るのではなく、作つた句を第三者に示すといふことは第二義的なことである。路那氏が眞剣なものは誰か々見てくれるといふことは事實であり、眞理であらうが、誰かに見せる爲めに、句を作るさいふこはいけないと思ふ。第三者に理解せしめんが爲めに句を作るさいふ態度は行き方が顛倒してゐると思ふ。

路那……素人氏の言はれた(第一)は同感です。(第二)は言ふまでもないことです(第

三)は素人氏の意見は少し極端に走つてゐて人間慾を無視した意見だと思ふ。純理論から行けばさうあるべきであるが、人間が死んで墓を築し死ねに先立つて葬式を出す人さへある世の中である。若し發表をしないでよいものならば、或は第三者の共鳴を得なくても貰いものならば、我々が野に立つて夕陽をリヅミカルに嘆息し、或は大いなる咏嘆の裡に或る至情を禮讚すれば足ると思ふ。然し之は人間の持つ慾望とは相容れないものである。そこに發表慾が生じて或は川柳となり或は他の詩型を借りて、その眞情を吐露するのである。さう私は考へてゐる。

素人……そこが難しい問題です……。

路那……然し發表して第三者の讚美を得るさいふこを目的として詩を作るさ云ふ變態的な態度を持つて、作句するさいふこは詩人として取るべきことでないことは論を待たぬ次第です。

素人……そんなら結構です私の言はうと思つてゐたのもその點です。

山雨樓……此機會に僕の信條を述べさせて頂きます、僕の川柳に對する愛着から、こゝした本質論に突つ込んだ御意見を聞かして頂いたことを大變嬉しく思ひます。

川柳に手を染めながら中途で止めてしまふもの、餘りに多い現象から、常に遺憾に思つてゐたのですが、こゝした本質論に比較的無關心な結果直きに飽いてしまふやうなことは實に惜しいことである。即ち川柳に對する態度が徹底せず、川柳の尊さが十分納得されてゐないことは飽迄反省せねばならぬ事と思ひます。

川柳は近代人に最も手近な表現形式で、而も生々しく感情の表はれば、僕の最、愛好する詩型であり、伴侶である。只その句作態度に於いて自己を偽つた拵さへあげたものを避けたいと思ふのである。路那氏も言はれた様に短かい人生の行路に於いて、豊かな純な生活感情を残して置くことに、至高な意義を認めたいと思ふ。つまり偽らざる自己の生活記録を、自己の至純な魂の記録として重んじたいと思ふのである。自己の魂の記録、自己の全的表現、さういつたものを理想として精進したいと思ふ、苟くも遊戯的な餘技的な態度に移つてはならぬと思ふ。

川柳の尊さに出發し、自己の磨きをかけて、こゝに意義を認めたいと思ふ。多面な句想を表はすことも、句主の至純な、眞剣な、出發である限り、その人の豊か、複雑さを賞讃したいと思ふ。(革那記)



漱石と子規、樗牛

長野吉高

『猫』の次に讀んだのが『行人』だつた様に思ふ。讀んでゐる間、限り無い欠伸が出た事を憶へてゐる。と言つても『行人』其のものが何も勝れてゐないと言ふのではない。たゞ、私にだけ面白く感じなかつたといふに過ぎぬ。他の人が讀めば、『行人』のもつこいゝ所を見つけたゞらうし、又随分面白く讀む事だらうが……

『行人』は、自分の體験を、特定の相手の前に披瀝しつくす目的を持つた手紙が一篇の眼目になつてゐる。

『行人』の主人公――私と同じ姓の長野――は愛を求めて愛に逢はず、誠を求めて誠に逢はず、然も其等のものをしつかりに握つてゐる意識しなければ落着かれない人間として描かれてゐる。其處に主人公長野の惱みがあるのである。狂氣に等しい其れは苦惱である。主人公は其の弟に、メレダスの書翰の一つに就いて話す

自分は女の容貌に満足する人を見ると羨しい、女の肉に満足する人を見て羨しい。自分は何うあつても女の靈といふか魂といふか、所謂スピリットをつかまなければ満足が出来ない。彼は、泥の中で狂ふ泥鰌の様であつた。弟は兄の身を思つて

此傾向で彼が段々進んで行つたなら、或は遠からず彼の精神に異状を呈する様になりはしまいか。と懸念して其れが急に恐ろしくなつた。

と言つてゐる。この主人公は、惱み通しに悩んでゐる。然し、彼は何處迄も自己を肯定して行く心が生きてゐるから、決して自殺する様な事はない。

私は、『行人』に於ける主人公の長野の氣持に同情する。夏目さんの氣持がハッキリと解る様な氣がする。然し、其れで何處かに物足らぬ感じを『行人』は私に持つて來る。

現實の長野、つまりこの私のこぢれた魂はあの『行人』の長野に、同情ミ理解は與へるが、然し其れ以上の何物をも與へ得ない。

やはり夏目さんのもので『こゝろ』と言ふのを讀んだ事がある
『こゝろ』は『行人』の形式を踏んでゐる事は、一讀誰にも解る事である。又『こゝろ』と『行人』は、其の形式の上からのみでなく、其の内容に於ても互に深い關係の有る事は、これ又一讀よく誰にも解る事であらう。『行人』の主人公の氣持は、前に一言した如く、何處迄も自分を肯定して行く。『こゝろ』の方は、主人公のあの先生は、何處迄も自己をいふものを否定して行く。世の中に愛想をつかし、最後に自分自身に愛想をつかした。『行人』の長野の悩みは外的から來る悩みである。他からつきつけられた悩みである。故に若し、周圍から暖めて貰ふ様な事になれば、彼の悩みも言ふものは無くなる、然るに『こゝろ』の先生の悩みは、内的から來る悩みである。魂のドンドン底からフツ／＼と湧き上つて來る悩みである。周圍から幾ら暖めても／＼何うにもならない絶望的な悩みであり、寂しさである。

しばらくしてゐる中に、私の心が其凄く閃きに應ずる様になりました。しまひには外から來ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでゐるもの、如く思はれ出して來たのです。

又言つてゐる。

人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つ可きだといふ氣になります。自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだといふ考が起ります。

『こゝろ』の主人公の悩みは、『行人』の主人公の悩みミ全然正反對である事が知れる。

其の形式の上から見て、其の内容から見て、『こゝろ』と『行人』は相關聯してゐる爲めに、私達は是非二者を並べて見るの必要がある。

私は『行人』より『心』の方により強く私の『心』を引かれた様な氣がする。

『三四郎』は、もう十年も前に、一寸讀んだ様な氣もする、がハツキリミは記憶せぬ。私が、夏目さんの作物を見たのは、たつたこれだけである。

夏目さんの事は、會つて笹川臨風博士から何かの折に一寸聞いた様に思ふ。臨風さんは、あのねつち／＼とした重い口調で、夏目クンを論じ、高山樗牛クンを論じた。

臨風さんの話によるミ、高山さんは、ごちらか言へば大變にはでな人で、假令ならば、七のものを十にも十一にも見せる様な人だつたさうである。夏目さんは全然反對で何處迄もじみな人だつたミのこゝろ。

高山さんは幸運兒で、早くから其の名を世に認められたが、夏目さんはこの點から行くミ、餘り恵まれた方ではない、ミも言へる。

高山さんは、其の文章に性格がよく現れてゐる。一見如何にもはいやかで、然も人をして十分に酔はしむるの力は有るが、然し其の裏にこもる底力が無い、深みに乏しい。高山さんのものは中年以下の人に悦ばれ、夏目さんのものは中年以上の人に悦ばれる。ミ

臨風さんのこの言が、果して正しいか否かは私の知る所でないが、然し、夏目さんを知り高山さんを知る臨風さんであれば、私はこの言を信じたいと思ふ。

私の書いた言を通りを臨風さんが話した言ふ意味でない。たゞ、以上私が綴つた様な意味の事を言つたのに過ぎないのである。

高山さんに就いて、一つの話が有るが、高山さんに就いては、餘り關係の無い本隔だから省いておく。

正岡子規さんは『なもし』の國に生れて其して『なもし』を使つて育つた一人である。『なもし』の國へ、フラリミやつて來た夏目さんミ、親交が有つたと思へば『これも因縁ぢやなもし』ミ言ひたくなる。

夏目さんがロンドンに居る時、正岡さんから送つた手紙が有る

……(略)僕は逆も君に再會することは出来ぬと思ふ。萬一出來たとしても其時は話も出来なくなつてゐるであらう。實は僕は生きてゐるのが苦しいのだ。僕の日記には「古白日来」の四字が特書してある處がある。書きたいことは多いが苦しいから許してくれ玉へ。

明治三十四年十一月六日燈下に書す

この手紙は、私がオギヤアミ生れた一月前に書かれたものである。この手紙を、正岡さんが病床で書いてた時には、私は未だ人間でなかつた。

夏目さんは言つてゐる。

此手紙は、美濃紙へ行書でかいてある。筆力は死の病人ミは思へぬ程たしかである。余は此手紙を見る度に何だか故人に對してすまぬ事をした様な氣がする(中略)憐れなる子規は余小通信を待ち暮しつ、待ち暮らした甲もなく呼吸を引き取つたのである。

ミ、子規の死を悼む漱石が、やがて又死んで行かうミは……さてくく人の世言ふものは、ミ嘆じたくなる。

夏目さんが、正岡さんの死を悼む文を見てゐるミ、私は何時でも定つて、淋しいミも、滑稽なミも、悲愴なミも、言ひ様のな一種の變な氣持がする。地の下では、夏目さんも正岡さんも笑ひながら

そんなに思つてる君も、やがて又死ぬんだよ。

「言つてるかも知れない。さうだ、私も亦死ななければならぬのだ。」

夏目さんは、明治の文化が生んだ偉者だ。

或人は私に言つた。

「漱石の様な人はもう日本に出ないぜ」

「成程、さうかも知れない。」

夏目さんを有名にした『猫』の悪口を言つたり『坊つちやん』

の事を兎や角言ふ私は實に不屈者である。自分でもあきれてる。

印度に

ら、

其は動く、其は動かす、其は近し、其は遠し

と言ふ様な意味の言葉がある。タゴールの或る論文を見てゐた

すべてものには、二様の見方がある。

言つてあつた様に思ふ。所が夏目さんも其の『猫』の中に次

の様な事を言つてゐる、

物には両面がある。両端を叩いて黑白の變化を同

一物の上に出す所が人間の融通しきく所である。方を逆さ

まにして見るさ寸方さなる所に愛嬌がある。天の橋立を股倉

から覗いて見ると又格別な趣が出る。

さ、流石夏目さんだけである。私の様な、文筆のルンペンが『も

う日本に出ないかも知れない』様な夏目さんの事を書いたり、夏目さんの作物を兎や角言ふ事は餘りに不都合かも知れぬ。だが、其の不都合な所に、或ひは漱石味が湧きはしないだらうか？

セクスピアも千古萬古セクスピアではつまらない。偶には股倉からハムレットを見て、君こりや駄目だよ、位に云ふ者がない。文界も進歩しないだらう。

夏目さんは斯う言つてゐる。夏目さん自身も千古萬古の夏目である事を望まなかつたらしい。偶には、股倉から『坊つちやん』や『猫』を見て貰ひたからう。定りきつた、おべんちやらたら〜の讚美は、其の實夏目さんはもう倦き〜してゐたに違ひない。

哀れな一個の存在に過ぎない私が、夏目漱石をロンジ、漱石の作物を云爲する事は、少々生意氣かも知れぬ。

だが然し、たまに股倉から天の橋立を見、股倉からハムレットを見る事も、さして趣味の無い事もないだらうと思ふ。

こりや駄目だよ、君、位に言ふ者がない。夏目さんも浮ばれないかも知れぬ。

私は、夏目さんを正直に、股倉から見たに過ぎぬ。夏目さんも、別に其れを怒らないだらう事を私は確信する。

漱石の猫ラテン語で名乗りあけ



生業の古川柳 (五)

蛭子省 二

(五十八) 鱈 賣
暖中益氣醪酒、解消渴、收持。

母 留守鱈を買つて知らむ顔
(五十九) 鱈 賣

弱し即ち弱魚の合字、水に易きを以て賣るをいそぐ。

生ま鱈見切にうつて水をまき
數萬群を爲して鱈に逐はる。海波赤色を呈す。漁業に尤も利あるもの、ほしかまなし油を採る。

お内儀の手をおんのける鱈賣
鱈の値か出来やしたと婢ふれ
ごまめでもすむ鱈を安くつけ
氣の迷さと取かへる鱈賣
氣の迷さと鱈を取替る

因に鱈の事を一名おむら或はむらさきに云ふは、酢阿笑に「鱈をば上蕪がたのこ

こばに、むらさきこもてはやさるよ。むらさきの色はあひにはましたさいふわんこや、されば下主らしきいはしも、其人のすきなねば鮎の魚にもまるよのふ』
紫式部の夫、左衛門 佐宣孝が、外出の留守中に鱈云ふ魚を食べたころ宣孝が歸つて笑つた折り、紫式部の歌に
日の本にはやらせ玉ふいはしみづ
まぬらぬ人はあらじぞ思ふ
此の歌から、紫の異名が出たに傳へられる。

まいらぬはなしと鱈をへらす口
清僧も鱈の鍋はのぞくなり
百姓囊巻四に、鱈は魚中第一の物にて、
萬民の利益大かたならず、殊に田地の養

ひこして世の寶なるべし。しかも食して尤も厚味也。末代世奢り華美を好む、風俗に成つて食する事を恥す。いにしへより禁裏堂上の人も食し給ひしにや、紫式部の食せられしを或人わらひいやしみければ云々

(六十) 牛 蒡 賣

正直州大鑑の小咄の一節『…此中お手前が太根牛蒡を賣るに、だいいだいいこつめて呼ばれたは合點がいかぬご問ふ。それも御尤もなれごも。あまの牛蒡を賣る時調子を上せん爲めに、だいいこつめて、其はねしをこんぼご申すで、呼聲が善うござる、牛蒡をはねるために大根をつめました…』
齒がぬけたさうでおかしい牛蒡賣
(六十一) 干 大 根 賣
賣聲は鞆の伸たる干大根
(六十二) 鹽 賣

鹽賣はよせと大星ふかいちろ
多葉粉屋は鹽屋に化けてつけねらひ
炭賣ご等しいものである。『きのふは今

日の物語

ある鹽賣、寺の前を賣りけるに、即ちよび入れて、先づ鹽をば買はずして、さてくそなたは鹽など賣りさうな人にてはない見所があるぞ賞むれば、鹽賣り申すやう。さてくよい目や、そこな折敷を一枚下されて、鹽を三升ばかりてさし出す、是はさいへば、今日は伯父の頼朝の日じやさいふた。

(六十三) 葩煎賣

和漢三才圖會に『攝州天王寺民家、用河州上糯米穀略濕而熬之。爆脹而釋自脫去潔白、如雪花。大三四分輕虛味甘美、小兒食之不妨又以養魚』昔は正朔に家内にこれを撒きこもて賣る云説有り、人のおもてもしらくとはぜやばぜはぜ賣は冬さ春との汐境はぜ五文小使帳のつけ初め

(六十四) 苗賣

(十一) 茄子苗賣參照

苗賣をよぶは地がりの立つた跡みかん籠霜よけをして苗を賣り

(六十五) 冷水賣

夏月清冷の泉を汲み白糖寒晒粉の團をを加へ一碗四文に賣る應求て八文十

二文にも賣は糖を多く加ふ也、賣詞ひやつこひく云、京阪にては此荷に似たるを路傍に居て賣る。一碗大概六文粉團を用ひず。白糖のみを加へ冷水賣云す砂糖水賣云云。

異本洞房語園に「ひささせ淺草御門の邊より、水道橋の邊まで御堀御普請ありし砌吉原を賑ふたり、夏の日の事が、冷水を賣る童、中の町に居しが、客人水丸望みて天目につ呑舌打して袂から銀錢十文斗取出し、冷水賣の小童にあたひければ、小童光る錢を見て、其儘宿へ歸り親共にみせければ親共も終に見たる事はなし、そこら持あるき、相店の者共に見せたり、此客人は平左衛門さいふ揚屋にて、京町高島屋が家のかほるさいふ太夫に折々逢れたり、此遊廓にて風流花麗なることも、折ふしには有さいへ共、冷水一杯銀十匁に賣れたるも随分下直なるものか

けんくわの跡へ水賣かくる水賣の一つか二つ錫茶碗ぬるま湯を辻々でうる暑い事樹下に居て冷つこいをあがらんか水賣は盆から錢を引つべかしさしよりの冷水賣ははやらない水賣もちぢいはぬるいやうにみえ

弓杖でやれひやつこひく十遣に出てゐる弓杖の出典は源賴義が奥州征伐をやつた折に、弓をつゝいて岩間から清水を出し、部下の渴を醫したさいふ類句を擧げると、

南無八さいひきらぬ内わく清水弓でした振舞水は名が高し弓は湧き太刀では沙がひてしまひ朝義は振舞水の元祖なり弓で湧き太刀で干上る武の譽因に江戸では玉川上水を不便な方面へ分配したものである。

そこが江戸一荷の水も波でうり一荷が四文、即ち波錢にかけた狂句である。

味へば甘露にまさる玉の水土金水箱入にする繁昌さ水晶も及ばぬ玉さ水をはめ玉川は百萬石にくみわける水賣の舟はじつんだやうに見ぬ玉の水榭ではかつて分るなり玉川の尻つぼみ諸侯分けてのみ



一路集

【募集句】

卵

片田舎卵ばかりで待遇され
 負けぬ氣の親方風邪へ玉子酒
 卵酒下戸も一杯進められ
 産み立の卵さ書いて鶏は居ず
 卵焼き三ツに分ける母の箸
 卵焼きうれしい今日の子の辨當
 あれこれと言はず卵を持つて行け
 結局は卵に決まる見舞物
 卵とは見へぬ板場の腕が立ち
 卵吸ふ且那を店は目で笑ひ
 醫者にあき玉子もあいたと便り
 卵から國の話を下女始め
 出養生卵を食ふて瘦せてゐる
 卵なき焼いてお菜に困ります
 病室へ卵だんく溜つて來
 申譯だけに卵の殻を積み
 玉子星は見舞さ聞いてかしこ
 無難作に玉子割るのも仲居なり

菊路 琴人 扇 南 生 内 義次 柳秀 鮎美 陽亭 眞柳 貴山 穂波子 冷笑 太路 突支坊 桂風 眠聲

村田周魚選

夜遊か過ぎると玉子酒吐られ
 初産の卵大切そうに云ひ
 下宿料朝の卵が二つ附き
 卵酒妻大けさに猪口をおき
 産たてをぬくい／＼持つてくる
 西陽射す賣れない卵孵化りさう
 地卵の心盡しは五ツ六ツ
 若夫婦卵を呑んでおかしがり
 もう一べん仰向いて卵吸ひ終り
 やせたわさ卵むく妓の手も白く

佳作

卵じも呑んだらさ父煤じてる
 くすぶつたお膳に卵二つ研え
 不景氣に小鳥の卵捨てられる
 いさかいの中に卵が割れている
 白い手で卵割るのを見つめられ
 卵割る手つきも馴れて子は癒り

梢雨 新水 四方路 泰平 ひさし 武路 光路 七六 正春 青水

美智坊 同 虚白 孤舟 新水 吉朗

川柳家の戸籍調へ

□ 係 ひろし生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八) 好きなタイプの子 (九) 自信の句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配遇者の有無 (一二) 嫌ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(201) 佐々本三福

(一) 佐々木彌太郎 (二) 三福三ナシ (四) 大連市龍田町一七五 (五) 明治二十三年九月 (六) 會社員 (七) 焼くやうな熱のある句 (八) 從順な餘り肥に過ぎざるタイプ (九) 昨日の自信句も今日は自信を失ふ赤面の至り (一〇) 謠曲 撞球、麻雀、乘馬 (一一) 有 (一二) 清物、(一三) 狂句、明治四十三年時代より

(202) 住田亂耽

(一) 住田長陽 (二) 亂耽 (三) 洛東紘、空氣亭、漫馬洞等々 (四) 兵庫縣武庫郡魚崎町魚崎五九八ノ二五 (五) 明治四十二年十二月八日 (六) 勉強トヤラチナル事 (七) 病みてあまえし少年の日に歸りたし、荷十(八) 路上美人、(但し曲線美を考究する女) 洋装よりも 純日本式嬉し(九) 近作のたんつはを集め小使消えてゆく(一〇) 民謡、キネマ、音楽をきくこと煙草 撞球 萬

墓

福田山雨樓選

墓参りまだ長生の杖をつき
ひつそりと墓に蜥蜴の這ふばかり
父親の墓も建てずに生ビール
金持ちの墓はかへつて重からう
トンネルを出る三七八つ墓かき
出世を墓にはつくり刻むなり
垣越に聞く鐘墓をぬけて麥
御僧の頭も墓も花吹雪
父一人娘一人雨の墓地へ来る
新墓のまだ灯の消えぬさびし
夕焼に駱駝か小さいピラミッド
淋しさは碑石が二つ新らしい
御先祖の墓の隣りが立派すぎ
意氣地なさ先祖の墓が睨むやう
墓守の酔ふて機嫌の花を替へ
墓の底に笑つて聞いているら
桂風
光路
泰平
一治
かい痴
柳秀
柳狂
武柳
梢雨
眠聲
愚圖六
與詩夫
陽喜亭
琴人
鮎美
好次

佳調 七句

母の日や墓に供へる栗饅頭
墓へ尻かけて浮世の長いこと
墓番の心配になる未亡人
墓一つ殖しただけの人間苦
おれの身もやがては墓の下敷か
姉の墓赤い夕陽が目に痛い
墓掃除することよき日の永さ
柳秀
好次
冷笑
穂波子
柳人
恒子
左馬

(五客)

現世で見る墓の高低や 鬼逸樓

理智の働きがないでもない、概念の洗禮を
脱し得てゐないかも知れぬけれども三誦
して座五の好調に思はず引き付けられる
十五字詩の典型
削られた墓地電車から見おろされ 一杉
叙景の句にしてこかも然らず。物質文化の
餘弊に鋭いメスを振つて尙餘蘊を蔵す。

閑御桶に今きた道、秋が浮き 町二
叙法の妙、着想の奇、自ら静寂の境をほう
ふつせしめてゐる。強ひての難點は技巧の
持味が勝ち越してゐる。

水うてば墓も言葉をかけたさう 光路
上五は打水でもするようで、措辭再考を要
するが、墓石に水をそ、いださきの感じが
受取れる。墓の擬人法に成功してゐると思
ふ。

墓の草むしり氣をとり直したく 白鷗
純情があふれてゐる。魂がふるへてゐる。
しかし、その内容から見てこれが川柳かど
うかを問題にする向もあるだらうと思は
れる。云はゞ俳想に近く短歌により近き境
地とも見られるであらう。だが、自分は川
柳としても立派に存在の價値があると思
ふ。短歌ではこんなに簡潔に歌へないし俳
句では、こんなに捉はれない詠み方が許さ
れない。

(八)

十日ほど生きた兒もゐるお墓へ來 琴人

よし老か師匠と言ふ腕) 酒(之も同じ)等
々運動ならなんでも来いであります(一)
一)今の所、無し三つけるべく餘儀なく
されます、(二)甘いもの、悪い意味の
禮儀複雑な笑の表情、全集、その他常識
をもつた人のきらひなものは、みなきら
ひであります(三)川柳界にのり出した
のは昭和二年一月であると思ひます
(2003) 田中三平

(一)田中隆(一)三平、(二)左、六哉(一)
四)大阪市住吉區天王寺町一七六九(五)
明治卅三年二月十四日(六)香水製造商(七)
七澤山アリマス(八)丸顔の從順な女(九)
アリマセン(一〇)酒、日本物映畫(時代
劇)芝居、野球、(一一)有、(一二)煙草を
吸ふ女、人蔘はうだら(一三)大正拾四年
秋頃
(2007) 北松白眼子

(一)北村脩(二)白眼子(四)白雨(俳號)
支塊子(四)函館市高砂町十八番地(五)明
治二十八年生(六)齒科醫師(七)澤山あり
すぎ(八)妻に似てない女(九)まだあり
ません(十)俳句、野球、(十一)有、子供五
人(十二)おべつか男、トマト(十三)大正
十三年春昭和貳年九月川柳野蔭會創立)
(2005) 平田梢雨

(一)平田節二郎と申ます(二)梢雨(三)史
歌、近頃は殆ど用ひませぬ(四)大阪市南
區南炭屋町五十二番地(五)明治三十四年

座五は如何にも難がある、こつて付けたよ
うな「來」である。けれども着想の深刻さ
は他の何れの句にも見られないところで
あつた。自分はまる二日さ、まる一年さし
か生けてあなかつた兒のいたまじさに、辛
い經驗をもつてゐるだけに思はずこの句
に飛びついた。誦してゐる内に聲がおろく
になるやうな深い感銘を覺ゆる。

(地)

戰友の墓は南風花さかり

一杉

廣漠たる滿洲の一角が偲ばれる。自然無
心な、無情さをこつ前に大和魂が快心の
笑をもちて安らかな眠りを續けてゐる
ことに熱涙をそそげばい。

この句を謳歌する反面に、次の婆心をなげ
うつことが出来ないのか遺憾とする。即ち
この句は實感から生れたものではなくし
て、空想或ひは智識から作り上げたもの
はなからうかぶ云ふ懸念である。勿論句は
必ずしも實在又は直接經驗でなくてはな
らぬさし云はないが、句を仕立上げる器用
さから知らず、實感から遠ざかつた句
を作つたり、又は題の爲めに作つたりする
やうな邪路に陥らないことが肝要だと思
ふ。

しかし、これは直感に基く付度で或ひは作
者に禮を失し、言葉かも知れないが、推賞
した句だけに包まず申上げる。

(天)

天國を淋しく見せる無縁墓

湖山

この句を集句中の歴感として推賞する評
價心理に反比例して、この句の難點は次か
ら次へその姿を表はして来る。即ち無縁
墓さ淋しさ云ふことには、一つの因果關
係が働いてゐる。天國の淋しさ云ふ着想
も機智であり穿ちである。句全体として概
念的な詠嘆にされないこともない。
けれども、それは餘りに生硬な詩論に立脚
するものであつて、少くとも義理人情に執
着をもつ普通人の世俗的な叫びとして、ひ
し／＼と胸に迫つて来るものがあること
を否定出来ない。自分はこゝ云つた作者の
脊後に感激に満ちた人類愛を見出さない
わけにはゆかなかつた。

(軸)

引導ノ聲しんみりと墓地をこめ 山雨樓

選後

募集句「墓」の選をさして頂くこの光榮を
擔つた自分は、その選を了して靜かに思ひを
巡らすと、うたゝ慚愧に堪へないものがある
ことを痛感する。自分のやうな淺學非才しか
も柳壇に新參の若輩が、よくも大膽にやれた
ものだとの感慨に、むしろぞつぞつくるくらひ
である。しかし足らなければ足らないだけに
より眞剣味をもつて盡したならば、幼稚なが
ら微意はお汲取願はれるものさ信じ、出来る
だけの努力を拂つたつもりでありませぬ。

又考へやうによつては、選は作者への挑戦状
であると共に、最も親しい友達であり共鳴者
であることへませぬ。只この反射鏡が如何に

十一月三日生(五)製版師(但シ平版)目下
は浪人です幸に柳友諸兄姉の中に同職に
交渉ある方が居られますならお世話下さ
いませ現在には内職に昔覺へた珠算の教師
を致して居ます、その勤務先は、西區北
堀江御池通大阪競算會本部、西成區橋通
一丁目大阪珠算普及會(七)大体に於て感
理の無い句、深酷な句輕妙な句をして無
きなの有り過ぎて、とても茲には書き
きれませぬ(八)此の御質問には聊かおそ
れ入ります、が勇を奮つてお答致します
身長は五尺を出ず、色白の調和のされた
顔立ち、そして健康美に富む女性、多血
質、脂肪過多性は嫌です、髪は和洋何れ
でも似合へば結構、化粧に愛身をやつす
人も嫌なら慢ぶる女も嫌です女らしい女
なら一苦勞も二苦勞もして見ぬいです。
(九)遺憾ながら未だありません、近き將
來にはキツトと言ふ信念は持つて居ます
そして努力を惜みませぬ、先輩諸兄姉の
御教導を今茲に伏て御願申上けます(十)
映論、觀劇、寫眞、音曲一切、童謡、歌
留多競技、目下は撞球に一生懸命、十一
御座いませぬ(十二)マト、西風、牛、
煮豆、乾魚、夏蜜柑、女の帯さりの姿、俗
に言ふ夏のアツバツバ、雨天、蛇、見榮
坊等、十二昭和二年八月、新聞柳壇に投
句して抜けたのが初め、川柳雜誌は九月
號から買ひ溜めました、私の川柳はおそ
らく死ぬ迄止せないうでせう。

作者の心境を照明するかは、選者の眞摯さ一
つにかゝるここだらうと思ふのであります。
自分はこの選に對して出来るだけ慎重に、自
分の全的努力を惜まなかつたつもりであり
ます。けれども自分の不敏さは申譯なき逸脱
があるかも知れませぬ。救はれざる謬見を敢
て冒してゐるかも知れませぬ。若し之等の點
に付て作者なり先輩諸氏から 忌憚なき御教
示を賜るならば、自分の幸せとするものであ
ります。

選は絶對であることが、最後のものであること
は、餘りに潜越な一時的な言ひ條であると思
ひます。殊に柳壇で自分如き未熟者の選を認
容せらるゝことは、更に權威ある先覺者の親
切な批判によつて透視され、裏書きせられな
い限り、一つの冒險であり不運であらうこと

空瓶

◇ 町二選

空瓶が埃の中で邪魔がられ 琴人
小使はいろんな瓶を出して賣り 同
藥瓶涙を拭いて捨てさせる 同
空瓶が化粧してまた二度の襖 紫庵坊
空瓶にレツテル硬くへばりつき 東狂子
子の空瓶の泥鎧眼が廻るやう 伴
空瓶にまかし 遭難船流れ 同
空瓶の如く退職扱はれ 鐵洲
ふさ花を空瓶にさす氣にもなり 耕民

へ考へるのであります。若しも之等の善意な
プロセスが、感情のわだかまりや勢力の争ひ
に終るが如きことがあるならば、自分は柳壇
の狭量さ頑冥さをなげくの外はないと思ふ。
集句五百七十三章句主八十二名の中から、頂
戴した句は餘りに夥なかつた。自分は右發表
句の外に、五十幾章頂いた句があるけれども
それは、前逃の意味から句主との私的交渉に
よつて、お互ひの進境を志したいが爲めにわ
ざざ預らして頂きます。言ひかへますならば
句主の自信力と自分の瘦腕との 圓滿なる會
合を樂みとして、相共に何物かをつかみたい
と念する爲めなのであります。これ等の句は
發表に及ばないなごも云ふ 大それた考へは
頭をかすめたこともないことを申添へてお
きます。

横松 田丘 眠町 二共選 聲

空瓶の金も粗略に妻はせず 瓢霞樓
空瓶を勝手に酒屋替へてゆき 一舟
空瓶を指だけ 提ける 紙屑屋 南天
空瓶を母と所にかため 柳秀
空瓶で形を作る 花畑 同
(佳)空瓶の埃へ指で酒と書き 鮎美
空瓶を賣ればバツトの鉢をくれ 同
よう飲まはりまんご紙屑屋 陽喜亭
空瓶に工夫危ふく身をかはし 同
空瓶でまあよかつたと云つて 貴山
はらくささせて空瓶積み終り 與詩夫





或に人が「私は雑吟でも題詠でも川柳に行き詰つた事が無い」三酒盃の間に言はれたのを聞いた事がある。「句はいくらでも出来る だがその句を書く間が惜しい」その人は言葉を續けて言はれた、それを聞いて私は生れながらに川柳製造機に出来上つて居るその人の頭を心の中で啗つてやつた。

その人は若し川柳の定義を聞かれたら堂々しく勇敢に論破出来るであらう、頭のよさを發揮するに違ひない。

或る人は大阪の柳界のもう先輩株

弱筆飛沫

住田 亂 耽

である、そして又既成川柳界のタイプを最も忠實に守つて居る哀れな一人なのである。

△ 句會は川柳を作る所である、決して川柳を生む場所でないと思ふ。

句會から歸る時いつも私は重い疲れと軽い失望を脊負はされる。

川柳工場から吐き出された職工の私はせめて道頓堀の灯があるここによつて漸く慰められて家への憂鬱な電車に乗るのである。

△ 川柳を頭から問題にせぬ俳人がある 此種類に屬する俳人は大抵俳句さへ口々に判らない底の人間である 私は確く信じて居る。俳句に筆みを斷つて、川柳に精進した結果、川柳の大家になつたことが、決してその人の詩才を割引する重要な原因とはならない、いやこんな立派な川柳人が昭和の川柳界に睥睨して居る爲めに或る俳句者流から柳界を輕視されるのかも知れない。

△ 或る川柳家が俳句會新傾向俳句の)に出席した、勿論自由を作るべしであるから、その人は川柳を出したさうである、所がその句の中に「秋」三言ふ一字があつた爲に問題にされなかつた新傾向さか、何んさか自由な表現に生きる俳人間にも季節を排せんが爲の重い桎梏がある事を思つて微笑まずには居られなかつた。兎に角日本の短詩壇は疲れて居る。



龍筆一の師圓大印法山野高

秋の高野行

柳 骨
萬 よし

一生に一度はお詣りせなければ、極樂往生出来ないといふ高野山へ。九月六日吟行を試みた。御參講の諸氏は路郎主幹、葎乃夫人、アト君、リ嬢、萬よし氏の一家總動員、夫人敏千嬢、喜久次君、二柳子、ひろし、かほる、五合、太閤の諸君萬よし氏の隣りの長澤氏及令嬢満致子さんとの十六名、午後二時二十分電車の人ごなる。

發車間もなく萬よし氏より登山講中への親切な號外が出る。内容は「路郎主幹の養生觀」「高橋家の長女出生」「講中への親切なる案内」等で

漫談に時の過ぐるを忘れる。何時の間にか杯が廻つてくる、萬よし氏は何所へ行つてもこれ丈けは忘れた事がないとの話。山を氣遣つてか？一滴もやらののはひろし、太閤の二君平氣で杯を重ねるのは路郎。萬よし、二柳子、かほる、五合君など私も一騎當千の勇を振ふ列車は早や紀見峠を全速力で走つてゐる。

皆いゝ機嫌である雨上りの靈山に霧がかかる。學文路の宿を後に絶勝を賞つゝ高野下へ着く。開通したばかりの登山電車は全鋼自動開閉の最新式で乗心地のよいところ。右は千仞の谷、左は天をつく絶壁の間を縫つて僅か二哩に十八ものト

ンネルがあつて傾斜の二十分の一は日本一の急勾配で難工事を思はず、こゝで既に海拔二千尺や、冷氣加はる。神谷で電車を捨て、旅装を整へ自動車で乗る。極樂橋から徒歩二十五丁、一行元氣を出して我先にご登る。六甲で疲れたひろし君も何んのこゝもないご第一着は大分弘法大師の御利益があるらしい。萬よし氏が自動車へ持ちこんだ笹の白鶴がない、でも諦めがよい。高野の人に吞ませりやいゝ宣傳になるぞうだ。霧雨が高山らしう見舞ふのが暑い日よりも氣持がいい。一人の落伍者もなく夕暮女人堂に着く空腹に出がらしの茶をすすつてやつとさ人心地がつく。夕闇せまる杉並木の大道を常喜院へ案内された。氣持のよい湯で俗塵を洗ひ浴衣に代へるごすつかりお寺は旅館の氣持ちごなる。お手前の精進料理は手に入つたもの、一行食ふごご呑むごご。杯が廻るに連れ思ひ／＼の餘興に時ならぬ賑ひを呈し十一時大廣間に敷かれた揃の夜具に一夜を開山大師に護られて安らかな夢を結ぶ。(高見柳骨記)

◇

昨夜の夜通しの雨に、笈の音谷に響いて妙なる調べあり、黎明の庭の横は霧に包まれたり。六時のお朝事に列りて、讀經に和すられたり。夜騒ぎ興じ顔事も見せず、朝食後院主法印大圓師の一筆龍揮毫を拜す、發止ミ巨筆を下せば、點晴ミ銀鬚先つ成り、畫龍の運筆に巨鱗細鱗腹背忽ち生じ宛然動くが如し。

金剛峰寺に關白秀次の靈を悼みつゝ、对萱堂では智慧に餓へたる子等の喜ぶこそ限りなし。姿見の井戸に長生の相を姿し芭蕉塚に柳運長久を祈る。

路耶主幹曰く「墓の大きいのは人間が小さいからだ、俺の墓所は高野じやないよ。」

ひろし氏曰く「思ふたより樂だ、今度はずいづを連れて來やう。」

柳骨講元曰く「案内に半助やるか。」

太閤氏曰く「俺が長生きしたら徳川にこんな大きな墓は許さないんだ。」

長澤氏曰く「近來稀に味ふ清遊だ。」

茂乃女史曰く「松や横の色は如何です。」

二柳子曰く「うちの吟行はいつても晴れる。」

五合氏曰く「山道は水泳のやうには行かんか。」

よほる氏曰く「ゑらひ墓だんなア。」

萬よし曰く「奥の院から大臺ヶ原へ廻るか。」

ため女曰く「浴衣がけでよかつた。」

子供四人先登切つて曰く「早うお出で〜。」

奥の院に今朝覺けた密教二三言を捧げ歸るさには各自案内人に出世して墓碑の説明を試る。山紫水明開山大師願はくば



童心に返つた吾等の洒落を嘉納ましませ
午餐後大門を仰いで遙かに紀の海を望め

ば煙波遙かに南海を望む、下山の道々は
雨後の處女林に蔥櫻なぎの初紅葉、呼應

の聲は瀧聲に和し、佛法僧鳥の音をさへ
きる。神谷の宿に最後の仇討の墓碑を拜
し午後七時大阪に着けば瀧の側の夜店の
灯明し。(庄萬よ記)

梨の皮むけは風あり女人堂 路耶 選
高野山むやげに困る所なり 同
姿見の井戸に自分の順が來て 同
たそがれに獨り後れて女人堂 ため
おあさぎに冥福願ふ母さなり 同
樹の栗草の露さへ有がたく ひろし
香をたげばはんにやはらみた奥の院 萬よし
尻押しは無言のまゝに不動坂 柳骨
墓石の大きき程に名は知れず 二柳子
雨やどりの姿で泊る高野山 同
燈明がまつすぐ立つも我ころ 同

山門 萬よし選
山門にたてば紀嘉の峯つゞき ひろし
山門の下に寝てゐる社會主義 柳骨
山門を借りて行商よく儲け 萬よし
山門へ長男一人先へ着き 太閤
山門で風を入れては女づれ ため
重いく足に山門闕があり 翠峰
いなづまへ山門覗みかへしたり 同
山門の粘土細工の様なり 同
山門をトホすいく通りぬけ 同
山門のこゝから内は金が入り 柳骨
山門で風があるなり夫婦つれ 二柳子

古句質疑

蛭子省二

舞坂で恥かしさうに富士覗き

大阪 梢 雨

珍らしい句で、今迄讀むだに憶がない
出所わからずの事、さうも句意も確信
がつかまぜん、單に東海道名所圖會が廣
重五十三次にでも出そうな光景ではな
らうかと思つてはゐます、二車の意味は
ないように考察する

約束の雨と日和を加賀土産

大阪 古 狂 (武玉川)

本誌の愛讀者には加賀のお方も多いか
ら。詳細はそちらで御調査を願ふとして

簀笠に不器用なのが鏡まき(古句)

のミノミカサの事ではなからうか。これ
なら雨三日和に縁つけられる。加賀簀は
有名なもので、草の細いのを材料として
編み、崩黄糸のアミをかけたもの、武家
用であつた『太平記十八、金ヶ崎城攻の
處、其勢吹雪の用意をして、物具の上に
簀笠を着なごみゆ、武家に軍陣ならでも
簀笠を用ゆるはその遺風によ』

笠は加賀笠も加賀菅笠も云ふ、用
捨箱下巻に『ほんほり丸綿わけよくかぶ
り、加賀の菅笠つゞら笠』、一代女には
『深紅のお七ざしの加賀笠』こある、我
衣に『天和の比より加賀笠、大名衆女の
かむりものなり、前を竹にて止めたり、
寶永未よりふちを針金にて止る、上總よ
りも出す、天和比は内をすけにて半分ふ
きたり、正徳より内一ぱいにふく、絹糸
ぬひきれいなり』近世女風俗考にも陳べ
てある。菅笠に就ては他の質疑句で説き
ましよう

菅笠は野宿の上も日照らし

大阪 M T 生

お蔭詣の句である、本誌七月號三十六
頁に抜け詣の句の説明があり、私も『京
』誌上かき度いと思つてゐた矢先、且つ
は御大典に關し伊勢參宮も行はるゝ興に
も添のべく、句解をしつゝ長談義をさし
て頂こう。上五下五の説明をした上、
お蔭詣に及びます。

菅笠は今日も遍路者が頂く、或は田
植時にもよく見かけのもの、昔は旅行に
専ら用ひられ、江戸では女太夫が被つて
三味をかかて歩いた。馬子の被るのも
其の一種であるが、古くは處女が宮詣な
ごに頂いた、塵塚談に女夏笠のこご、寶
曆頃迄は女笠にて菅にて大きく飛脚の三
度様なるを用ひたり、紐は後の方を輪に
なし、髻の下へかけ腰の下にて結ぶ。
菅笠の中へ帯をまく眞菰刈
菅笠を元直にうつて書、イヤリ
菅笠は照るさ降の二おもて

菅笠の雨に我身を抱いてくる
菅笠へあてがつてゐるすいかつら
菅笠の青海波はお陸ごし
角田川もう菅笠の事云ふ

源、賢の傘笠考に、今の世常用の物なれ
古の製かはりたる所もあるにや、未
考、菅を以て笠に作るは上に云る菅の大
笠や始めなるべき古歌に縫よし見わた
れば、今の世の如く縫し物にや、古歌
をあけて居る、我衣に寶永より始て杉形
のスゲ笠大にはやる、寶永以來菅笠の内
ふちまでふきたり、止り淺黄のハタ糸、
寶永迄は笠あて菅ひも、淺きの加々、ひ
もも細く笠あても尋常なり、正徳よりも
みにする、享保笠あて大ぶりになる、或
表白裏もみの笠あてで、元文より駿河
町越後屋にて色々笠あてをうる、黒ち
りめん紅うら緋ぢりめん、兩裏黒びろ、
ご紅裏等あり『賤のをだ巻』には寶曆の
始めより誰か青き紙にて張たる日傘をさ

し始めて後は、女の菅笠はずたりて、今
は女の笠をかぶる云ふことは絶てなし
『近世女風俗考』にも記し古圖が載せら
れ『さて此菅笠は天和の末、貞享年間よ
り以前の古書に見へざれば、當時より流
りしものなるべし、殊更元祿始の頃は專
らなれるにや、櫻陰秘史(元祿二年印本
)には所々にかふれる體あり。以上で菅
笠の句を解する便は得られよう、八十翁
嘯昔話に、菅は水邊に生ふる故日を不透
夏の笠は菅よりよきなし。こ、

『天照らし』の下五は、伊勢を表示し
た拙ない技巧である、尤も『照てる』
『照らす』は萬葉なごにも多く用ゐられて
ゐる古語ではある、

天照らす字が抜けのけの笠しるし
天照らす神さて地にも星の茶屋
國の風二つ頂だく照の文字
皆狂臭を帯びてゐる(國の恩の二つこは
天照と東照の意)

お蔭參、こは道中お蔭を蒙つてゆくから
抜參りはコツソリぬけてゆくからの説に
は、對があつて。東廬子に、伊勢太神宮
へ參宮に限り抜參り云ふべし、外宮は
は豊受皇太神宮にまはせば、參宮も
不苦、内宮は宗廟たれば猥りに參宮す
る事を禁ぜらる、畢竟外宮へ參宮の序に
抜け參りゆけなり、先師原田越齋子は
申されき、是主人父母の前を抜まるるに
わらず、全官府を恐れみ奉り、ぬけ
て參るゆへにぞ斯は云來る事ひさしこか
や、こ、他にも傳説はあつて要するに起
原は明らかでない、伊勢の某武家の下人
で太神宮篤く信奉する者があり、主家の
許しを得ずして參拜した、主人歸るをま
つて斬殺し埋めた處、其後その者が歸つ
て居るのを不思議がり、地を掘りおこし
てみたら、大麻に刀痕がついて居た云
ふ、これよりヌケマイリと稱したこもあ
る。

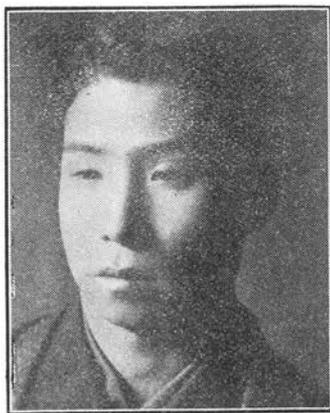
桃哉兄逝く

山川白蝶

薄倖詩人河村桃哉逝く、此日八月二十三日午前九時三十分。所は阪急沿線池田町附近の尊鉢村、彼が手作りのトマトは色づき、朝顔は花を開けざるは遂に起たす、十年の病梅毒生活を捨て、三十九歳を一期として天國に旅立てり。彼が日頃信心せし日蓮大菩薩は今や「唱行院良得日義信士」さなりし彼を蓮の臺に迎へ安穩の住家を興へしならん。地上の冷たき波風にもまれ、彼方を追はれ、此方で退去を命ぜられ病に瘦せし身を喪家の狗の如くに漂泊し、遂には相愛の妻をも奪はれ一人淋しく此の世に別れを告げし彼も今は天國の淨土に救はれ、始めて安らげき眠りに入りしならん。

彼性潔癖にして實直、極めて事務に精勵、名古屋に生れ、神戸に出て、食堂列

車の乗務員となりし後は、その實直と精勵が認められ、舊主より非常に信頼されその回春を待たれしに再びその美しき面影を食堂列車に現はさずして逝けり、彼は大正十四年一月より川柳に指を染め爾來四ヶ年間、川柳を唯一の伴侶として生



けり。小鳥を飼ひ、花を作り、繪を描き自然に親しめば親しむ程彼は川柳に愛着を感じしものゝ如し、彼の句を「川柳雜誌」より抜けば

食堂車富士を見ながら二合あけ

早見遁助君を悼む

遺言がないか聞けば辭世の句善人であるも不幸のつくこと犯人の目にも櫻の華やかさ氣安うは破れ疊を氣にもせず春の川目高の列もいさましう彫付かれず柱の割れる音淋し紋服のまゝで商ふ松の内（週刊朝日）瘦腕に同情も無く蚊がごまり（遺句）順禮が蟻踏むまいと困る也（同）

彼の死を豫期して作句せる遺句は八月十九日の作なり、彼の二句はその儘にして即身成佛なり、噫彼遂に逝く、悼しい哉我れ語らんとして語り得ず、泣かんぞ欲するも涙出でず、僅かに筆を取つて彼の佛前に句を手向くるのみ。…桃哉兄よ天國に於ても川柳を宣傳してくれ給へ、川柳を作つてくれ給へ。

奇蹟てふ夢なきことも願ひしに白蝶靈魂の不滅を信じ切つて死に遺言を云ふてしまふて樂になり思ひなしか楓の花も色あせて一七日糸瓜の伸びたのも目立ち

其象兄を悼む

安西 杏三

悪夢にうなされた寝苦しい午睡をK君に呼び起された。何か不吉なことがあつたなご云ふ直観が頭の中を走つた。

K君から渡された葉書、それは親友久住其象兄の死亡通知であつた。夢ではないか、悪夢のつゞきではないかご、一度見直して見たが、矢張り文字は黒々ご意地悪く其象兄の死を傳へてゐる。

其象兄が長い間の病氣が全快して退院された、昨年九月のあの喜びに燃へた顔は今に忘れることが出来ない、自分も早く其象兄のやうに退院したいご、ごのくらしい兄を羨ましく思つたか知れない。それに早く全快して退院された兄が、僕よりも先に彼の世に旅立れやうごは……人間の運命は不可解だ、永遠に解けざる謎だ、先に死すべき運命に置かれた自分が生き永らへて、世に出て大いに活動

さるべき筈の其象兄を死神が擱むごはごう考へて見ても分らない。

退院後の其象兄からは、本社の句會に出席されて、いつも披露される卓の下に座つて皆様の句を味はつてゐる喜び、路郎先生のお話に感激されたごなごをよく手紙で僕のこころへ送つて來られた



それに依つて自分達は本社の句會の有様を想像して、早く全快して本社の句會に一度でもよいから顔を出したいのもだご思はされた。其象兄逝き今日、誰が本社の句會の有様を知らせて下さるでせうかそれを思ふご、言ひ知れぬ淋しさが湧くのである。

其象兄は久住喜三郎が本名で喜三をモヂつて其象ごいふ雅號をつけられたのではないかご思つてゐる。明治三十五年生れであるから、今年廿七歳である。この若い人の生命を奪つて行つた病魔、死神に對しては衷心から抗議を申込みたい。其象兄が川柳を始められたのは、大正十三年からであるから、足掛五年になるその句が川柳漫話にもなられたごもあり、可成り佳句にして推稱された句もあるのであるが、兄は寡黙の人で別にそれを誇らうごもせず、又柳論を闘はずごいふや、なごもごもなく、黙々として自己を深く掘り下げるごにのみ専念されてゐたやうである。兄は全く川柳に依つて新しく生くべき道を發見し、川柳のみに没頭して一句を残せご云はれた路郎先生の言を遵奉して専心句作三昧に入つて居られたのではないかご思はれるごが多々ある。

兄は亡くなられる前日に少し具合が悪

く臥た儘で、苦しい中から號外を讀まれたのが最後に目を通された文字であつたさうである。八月二十四日は早朝から呼吸が苦しいと云つて妹弟達を枕許に呼ばれて『長らく御心配をかけて濟まなかつた』と云つて、いろいろと別れる言葉をかはされた末

『わしは親に先立つて濟まぬ。わしは親不孝者や』

と言はれたのが最後の言葉で、息を引取られたのが午前十時三十分だつたさうである。この臨終の模様を聞き、其象兄の心中を察し僕は涙を禁ずることが出来な

い、もうこれ以上何も書けぬ。たゞ故人の残された句を集めて、故人を偲ぶよすががしたい。

娘もう焚火のそばへ寄りつかず病んでゐる俺に聞える籠の鳥竹こまの音も舂らし天王寺無作法を喜ばれるも男の子退院をする日の下駄の履心地

性のこゝ娘同士の智慧を貸し夏やせを晴着の中に見せてゐる隣の子もう朝晩の化粧する大學を出て華やかな世と言へず立志傳戀を覺へし日もあらむ百圓と云へば驚くかと思ひ自働電話女なか／＼出ては來ず天勝にちと氣味悪いかぶりつき改札の鼻に松茸よく匂ひ停電に今更月のありがたしヌエターで來たを色街無粹がり綻びを待つてましたと許嫁紙函やだん／＼夜の量になり正直に生れて借家住ひなり人間の智慧鏡前を頼りすぎ晩酌の前善人になりすまし子の下駄が散らばるすこやかさ女湯の晝ひつそりと朱子の襟思惑があつたら云へと男親命持は下駄の音さい落ついてなぐさめるこゝに人間嘘を交ぜ世辭を云ふことを覺を淋しさよ腕時計買つて貰へば別れる氣

醉漢へ女給臆する色もなく牡丹刷毛今夜の口説考へるふみ覺めてみて肖像の恐ろしく御寮人鯛一匹に出で給ひすき燒の湯氣の向ふに冬が見へ不景氣を子供に話す寒い晩迷子の只賑やかな方へ行き

殘本と合本

殘本が少しありませぬ欠本があるために合本が出来ずに御困りの方は此際至急本社事務所(大阪市住吉區杭全町六〇三川柳雜誌社事務所)宛に御申込み下さい特に左の値段でお願致します。

第一二三巻各號 各一部金拾
 第四五巻 各號 同 金拾五錢
 (但し第一巻第一號、同九號、第二巻第十號、第三巻第二號、第四巻第一號は欠本)

本社では合本を作り、總布製美麗表紙附(金文字入り)で書架を飾るにふさわしい簡素な装積です。左の値段でお願致します。本社事務所まで御申込下さい。

第一巻及第二巻 各 金五圓也
 第三巻及第四巻 各 金參圓也



各地柳壇

柳珍堂忌

柳珍堂の命日は……十四日であるが、社都合で九月八日午後七時日本橋俱樂部で、柳珍堂忌を營んだ。

素人氏の柳珍堂の思ひ出話と、病中をおして出席された路那先生の同じく、靜かな追憶談を聞く。

啞と誤まれた程沈黙の人で、酒好きの柳珍堂と寡黙の文人と、又酒好きだった葛西善藏とが、同じ様な臨終をせられたことを聞いて柳珍堂の面目をまご／＼眼前に浮べて、一同散會。

(二柳子記)

(參會者) 路那、悟空、琴人、素人、孤舟、桂風、露斗、亂耽、雅流、文蝶、幸泉、愚陀、里十九、源坊、陽喜亭、萬よし、春彦、鳴玉、丸葉、柳狂、柳人、眠聲、觀月、鮎美、香陽、吉則、革郎、迷亭、文久、双虎、實山、柳笑、浮草、山雨樓、舟々、流星、十紫、不滅、忠八、豚二郎、紋太、二南、雲柳、嶺月、突支坊、加香、三笑、柳骨、太閤、双葉千武子、二柳子。

兼題 集金人 紋 太選

集金人の眼にうなづけるき、好き集金人きつちり呉れるなき思ひ間違ひを集金人もうるさかり見榮もなく集金人の服が焦けよそはみなくれないやうに集金人お叱言は集金人の知らぬこそ集金人疑られるが小癪なり受附へ寄らず集金人は來る集金人途中で逢つてついで來る集金にきた尼寺の臺所當然のやうに集金つりがなし集金人期日とつかり聞いて行き思ふ様に寄つて集金人の畫ちまきつう閉めたと思ふ集金人(人)集金の腰をのびしてわが身体(地)集金に出てゆく膳の鹽こんぶ(天)集金人二人も娘死なして居

柳 亂耽 柳 柳骨 迷亭 丸葉 革郎 柳狂 嶺月 春彦 鮎美 十紫 雅流 忠八 舟々 山雨樓 鮎美 嶺月

愚痴を云ふ妻へそ知らぬ發明者 双葉千 太閤 久選 席題 愚痴 文 久選

簪を落した愚痴は手をかざし愚痴ばかり云ふて養老院暮らし女房の愚痴の通りに聞かぬ根氣よく女房の愚痴を聞いてやり母親の愚痴へ遊ふ夜もありて愚痴ばかり言ふて人にはなり茶をのんで愚痴長々こ續くなり愚痴なる母を慰め乍ら秋愚痴は云ふまい下駄を揃へる夜遊びへ愚痴がつきない臺所聞きあいた愚痴をすまなく思て居世常覆え寝てから愚痴續くばかり(佳)内職の愚痴を黙々聞くばかり(佳)御近所の愚痴の一つの子を育て(佳)愚痴を言ふ男になつて友の來す(佳)掛取の愚痴は格子を閉めてから(佳)座蒲團を折つて愚痴が出る(佳)挨拶の續きに愚痴の出る暮(佳)負けたから詰手の愚痴をも返し(佳)橋の下菰着たのにも愚痴が(佳)樂しみは愚痴を聞かせるだの母(秀)女房の愚痴紋付を流したり(秀)恩人の愚痴に益にがくなり(軸)咲く花へ愚痴云ふ人になつて死に

山雨樓 源坊 孤舟 桂風 亂耽 雙虎 愚陀 舟々 同流 雅流 同流 舟々 愚痴 雙虎 亂耽 同流 嶺月 迷亭 二南 迷亭 十紫 吞陽 福氣亭 幸福 革郎 素人 二南 文久 丸葉 源坊 露斗 陽氣亭 琴人 舟々

物干へ客をよんでる煙草盆 柳窓亭 飛車角にならぬ煙草盆が要り 癪不足のまつり引き寄せる煙草盆 煙草盆出してお客へ斜に向き 掃く先を煙草盆だけ持つて逃げ 煙草盆障子があくさ笑顔也

御歴代只棒讀みに覺ねてゐる 吉 耶
 天平の作でも 度ふりかへり 同
 忠臣の一人判らぬ儘になり 孤 舟
 菅公の遺蹟を問へば梅白し 同
 大根のやうに斬られた先祖にて 山雨樓
 秀吉が一人歴史であげられて居 同
 主催渡島川柳社、川柳雜詩社、函館支部
 路 耶氏 歡迎會(函館)
 三太郎氏

龜井花童子報

路那氏は僅れの北海道へ來られた。そして
 三太郎氏と偶然にも落合つたので、身体が勝
 れない路那氏に御迷惑と思ひながらも、三太
 郎氏と同伴された。雨吉氏及札幌から路那氏
 に逢ひに來た夜半杖氏等の爲に、八月廿日午
 後五時より句會を開き、閉會後席を改めて歡
 迎宴に移り主客一人残らず、隠し藝に柳談に
 花を咲かして散會せるは拾遺時だつた。

花童子 選

粗板にすつぱり切れた音がする 雨 吉
 牛焼はその日バタ／＼張り初め 夜半杖
 村中が總出戸板で醫者へ來る 凡 人
 踏みならせば板に悲しみのみ残り 路 耶
 スヌツイ板をなすめて懸轉げ 狂 水
 板の間へちやんこ坐つて暇乞ひ 雨 吉
 溝敷のこゝで家主と露路に立ち 同
 板前の淋しく己が膳につき 源一耶
 面白く板が重なる製材所 喜多坊
 張板が倒れて走り出る女 三津蜂
 板す切れ丈けでも子供よく遊び 夜半杖
 板扉に捨兒の聲のいた／＼し 路 耶

(人)板の間の光りに蟻のうろたゑる
 (地)截板が重く夏瘦虫が切れ
 (天)板圍ひ覗けば草に飛ぶ
 夜半杖 選

池一つ 残して鱧また潜り
 水面へ轉り出した水の泡
 ツーダ水アツク泡を立てる姉
 ぶつ／＼と溝が泡立つ暑いこゝ
 潜水夫のこぼらした泡を立て
 氣持ちよくこぼれた泡へハンカチ
 金魚鉢泡を浮べて戯れる
 溝の泡一つ出来れば一つ消ぬ
 人生の末路を嗤ふ泡ばかり
 泡が出る出る洗濯の垢が出る
 池一つ風に吹かれてどこへ行く
 注ぎ足らぬにサイダの泡が消ぬ
 石鹼屋自慢の泡を幾度立て
 凡人のたゞ見れば泡がつぶやきの
 行水を捨てれば泡が地に残り
 サイダーを注げば其泡わめくやう
 (人)ぶちあげた鱧いささか泡に
 (地)シヤホン玉靜かに吹かすつ出る
 (天)父さん湯に行こ来た耳の泡
 雨 吉
 此方にも淋しさはある虫の聲
 虫よ虫よ僕も一緒に鳴いてやる
 餌箱から蚯蚓が出て雨つゞき
 蠅取紙最後の羽音たてゝ死に
 虫一つ摘んで大事そうに投げ
 深情けその虫の音をよそにして
 ハンモツク毛虫が落ちて場所を替は
 狂 水
 夜半杖
 雨 吉
 里 魚
 花童子
 雨 吉
 利喜馬
 六步醉
 狂 水
 喜多坊
 同
 都れ尺
 五 稜
 凡 人
 吐 千
 路 耶
 春 忘
 雨 吉
 同
 利喜馬
 白眼子
 雨 吉
 白眼子
 路 耶
 夜半杖
 吐根舎
 花童子
 路 耶
 喜多坊

虫じつと葉裏にしがみついて住み
 虫の音にひたれば土の香が流れ
 わが物のやうに飛んでる膳の繩
 虫籠へ空洞の瞳投げてゐる
 (五客)虫一つ三を切らした止み
 虫の聲淋しいものに獨り聴き
 虫をおそるゝ妻の美し
 たゞ鳴いて／＼鈴虫死ぬべかり
 強情な蚤を醜く潰すなり
 (人)自序傳を書いてるやうな蝸牛
 (地)鳴く虫の夜更けの窓に浴けり
 (天)病人へいよ虫／＼の押し迫り
 半 分
 日本へ陽が當つてる船の旅
 半分の返事それさうなづく
 コーヒーを半分呑んだまゝの母
 煙草屋の半分貸して狭く住み
 小使は半分撮り旗が見ぬ
 二階まで貸して婆アは少さくぬる
 半分は酒に消へたり君さ僕
 半分にわけた毛が来る鼻の先
 もぎ取つたやうにピルデンクの隣
 庖刀の禮に半分西瓜張り
 (秀)白墨の折れたまこも四角張り
 (秀)灰皿の葉巻半分すつたまゝ
 (秀)諦めてゐる片側の帯があまり
 (秀)半分の自己を鏡に信じきり
 天 井
 天井まで流電はつきりささせる
 天井にカラ／＼笑ふ悪覺主義
 着飾つて天井を低ふ家を出る
 五 稜
 狂 水
 源 耶
 三津蜂
 白眼子
 里 魚
 路 耶
 利喜馬
 同
 三太郎
 同
 五 稜
 三太郎
 路 耶
 雨 吉
 雨 吉
 春 忘
 雨 吉
 吐根舎
 路 耶
 雨 吉
 都れ尺
 利喜馬
 雨 吉
 松 宵
 春 忘
 夜半杖
 吐 千
 路 耶
 三太郎
 吐 千
 白眼子

(佳)彼女とも暫らく逢はぬ粉燻草
 (佳)友達も今日も彼女の事さなり
 (佳)うれしさを彼女へ行く日々
 (軸)前巻の終り彼女を海を超に
 席題 虫の聲 番 翁 選

虫の聲 下宿住あが考へる
 夜もすがら虫さ語るか石燈籠
 こほろぎが納戸の書を啼いてゐる
 宿題はさげすに虫の聲をきき
 秀才の耳を盗んだ虫の聲
 二階の灯届かぬころ虫を聞く
 口論に負けた口惜しさ虫を聞き
 虫の音へ一階の男下駄をはき
 夜學校の便所の暗さ虫が鳴き
 期々さ虫が啼いてる路次の奥
 降り止んだ空へ蟋蟀啼き續け
 虫の聲さされぬ門の貸家札
 牛の嚼む鼻先に虫啼きやめず
 (人)人間に虫感違ひされて鳴き
 (地)どうきいてひ虫の氣に人らず
 (天)蟲聞いてゐる様に私服巡查
 (軸)虫の聲ハタさ止つて氣がさ
 兼題 母性愛 太 選

(地)母性愛車内でおむつ替へて
 (天)降りそよな朝も乾し母性愛
 (軸)番臺のつくくを見る母性愛
 川柳 北濱支部九月例会(大阪)
 雜誌社
 九月九日午後六時三十分 於北濱竹内商店
 席上 六角桂風報

國の母次男の方が好きと見え
 嫂が來てから次男家を明け
 次男の方が聡りしてゐるよ
 次男坊叱るの家を出ると言ひ
 柔道を習ふて次男夜を更かし
 次男も生れた氣安さに背丈のび
 次男坊まめに遊ぶを喜ばれ
 姑は次男の嫁さうまがあい
 藝術に生きんと次男毛を伸ばし
 病弱の兄に次男の遊び好き
 席題 身の上 ひろし 選

身の上を聞くだけ聞いて金が無し
 身の上を又逢ひながら口ごもる
 兼題 縁談 萬よし 選

出戻りの姉も手傳ふ目度い日
 隣りから羽織着て來る娘の儀
 縁談の歸へり娘に出合ふなり
 またさ無縁に仲人してしまひ
 縁談さ知れて俄にお茶を替へ
 不景氣と別に縁談運ばれる
 縁談に小供は先へ寢さくれる
 縁談に來てゐる中をランニカ
 町内の馬鹿へ縁談出來かける
 丙午承知で僕が貰ひます
 コーチして居るに縁談出來上り
 縁談に私なごさ丙午
 縁談を故郷で決めて一さ稼ぎ
 縁談の有つとも知らず娘逝き
 縁談に娘は猫へほすりし
 縁談は縁談さとしてカクテル
 (軸)父親の來る縁談は纏らず
 兼題 故郷 三 笑

安西杏三報

八月廿三四日續いて、永眠された河村桃哉。久住其象兩兄の追悼句會を横臥室で九月二日開きました。路郎主幹が御病中にも拘らず御出席下さいました事を厚く感謝致します。

追悼吟 路郎選

亡き友の悼追會して物足らず 氷壺
過去の事等思ひ出させて友は逝き 一立
人生の旅打ち切つて何處へ行く 光哉
はつきり慕ふ心になつてゐる 同
蟬ひ出の横顔やはり瘦せてゐる 杏三
蟬の聲聞くにつけ君がおらぬ 二柳子
土へ歸るに靜かにさよなら 萬よし
其象を悼む

行き先きも知らさず句帳のみ残り 路郎
桃哉を悼む

かなしくも池田は雲の青々も 同
桃哉を悼む

許嫁男が死んだら死ぬだるか 紫海
つゝ立つて居れば町名聞きに来る 光哉
ぬかるみへ足突込んだ高島田 繁
避暑歸り疊て抜手切つて見せ 杏三
野球など噂に聞いて病むでゐる 一立

(軸) 恐い夢見たを解は虚言にされ 萬よし
兼題 無理 二柳子選

無理のないことを母だけ主張する 萬よし
無理ばかり云ふてさう／＼死にたい 杏三
立志傳無理なことを書き 同
無理なこと言つて相手の氣なたい 光哉

少こしは無理もして見る病み上り 光哉

無理算段しても越せない三十日なり 葛西
無理をした晴着さしらずにはやま 氷壺
意地づくば無理さ知りつゝ負ける 同
色々の無理が故郷を離れたる 寂郎
(軸) 無理ばかり云はれて介抱おこな 二柳子
兼題 水 杏三選

洪水につかれ切たる家ばかり 湖舟
蟻の塔水一滴の騒ぎやう 湖舟
唧筒もう水はち切つた音になり 光哉
男湯は水をかけたのがけんのさ 菊三
濁つても夜は赤い灯ゆらめいて 寂郎
水のやうな秋ひや／＼かにも肥ん 同
洪水に矢張り流れて水すまし 萬よし
水底の石いつこなく流される 同

川柳雜誌社 出端柳社例會(鳥取)

走馬燈倦の暮しを見せ付けて 早川聽松選
全盛に寄進燈籠にしのばれて 稻太夫
盆燈籠踊の唄を遠く聞く 湖山
燈籠の寄進に墓の少さ過ぎ 耕民
村外れ燈籠に残る初代の名 饑洲
常夜燈心安さの下駄の音 穂波
來客に自慢の庭に灯を入れる 青水
裏座敷建て燈籠の位置をか 聽風
(軸) 先代の氣性が見ゆる石燈籠 聽松
兼題 蟬 澤香長選

後押の背か蟬をれだられる 源大夫
縊つてた枝に見付けた蟬の殻 佳水
灼熱をあざける様に蟬は鳴き ゴ

紙袋蟬仰山に封じられ 放我
精かざる蟬は歌ふて夏を逝き 耕山
蟬になる朝を靜かに殻を脱ぎ 湖山
華氏百度蟬の世界に燃きつて 饑洲
勉強の子を誘ひ出す蟬の聲 青水
(軸) 妹のこわがる蟬を持つてくる 舌長
兼題 善 互選

義損金一度できまる裏通り 源大夫
施した其の日は早う暮れてゆき 源大夫
慈善家さ云はれて夫婦淋しがり 佳水
食ふ丈の暮しの上へ義損金 稻花
捨てた子の夢養老院で今日も見 湖山
施してのんびりさした氣にもなり 耕民
慈善てふ物さ貴婦人戯れる 饑洲
孤兒院へ斷りかれた筆を買ひ 穂波
裕福で慈善するのでないの也 青水
施米日は蟬の甘きにつく如し 一風

川柳雜誌社 姫島支部句會(大阪)

曾我廼家の女中に惜しい女形 賀名芽
女形瘦せてゐるのがよく目立ち 冷笑
女形鼻のつまるをおぼへて來 石竹
母親さはなれ借りてゐる女形 鮎美
女形素足を見れば座りだこ 同
母親へ襟かき合はす女形 同
(軸) 實川に今度變つた女形 かほる
兼題 院 長 萬よし選

院長へ暮しの事も打あけて 觀月

月二會例會(尼崎)

八月十八日

席題 債權者

債權者へしづ／＼／＼運はれる
 債權者キチンと證書疊んでる
 債權者言葉少なく座つてゐる
 債權者桐の箆筒に目が届き
 債權者同志かち合ふ貸家札

兼題 日盛り

日盛りに反射してゐる父の線
 日盛りを銀行へ行く用が出来
 日盛りに煉瓦黙々積れてる
 日盛りを寢かす親の一苦勞
 日盛りに秋の收穫おもはれて
 日盛りに言葉を聞けば朝鮮人
 日盛りを兄の泣聲にいらだつて
 日盛りに千日前をだるうゆき
 日盛りにさぼ／＼さ來る配達夫
 日盛りの歸路ながさめるきりぎりす

名賀壽會例會(尼崎)

八月十二日於虛白居

席題 野珠

ツウ、スライ、フアンの扇も一時
 憂然と強打の音に鱷波の聲
 掲示板零又零で緊張しきくを
 大飛球見上ぐる選手齒の白き
 満盞にコーチ椅子に居たまらず
 期待した時三振のあつけなさ

兼題 母校

眠聲選

プレートに立つて母校の荷が重し
 針箱に錆た母校の徽章が
 時々は母校の唄で子をあやし
 腕よりは母校が生かす課長殿
 一高を自慢に話す課長殿
 (佳)飛行機は母校の上で一つ舞ひ
 (軸)旅の空母校の事なごもう忘れ

第十四回 鼎座小集 (神戸)

千鳥報

承らく休んで居た三人組の小集を本月よ
 り復活致しました、何うぞ御鞭撻を御願ひ致
 します。

寶石

互

ヒスイ賣り場末の軒で雨を避け
 柄にない望みダイヤが欲しいは
 硝子越一千圓の石があり
 小つぼけな石が着綿に圍われて

支那人

互

日曜と知るや知らずや絹袖賣
 支那語ち話せて行商冷かされ
 未婚者は斷髪せよ支那の知事
 支那手品あぶのう箱の上へ立ち
 支那街を伴れた子供は臭がつて

セ

互

同じセル春の心地になれぬ秋
 セルの子の中へ裕ゆの子が一人
 セル一重下で波打つ丸い肩
 セルを着て煙草屋の娘座つて
 お姉様セル着る秋も病んでゐる

北柳君は元の芳香子に復活しました句に

院長へ見てもらふに晝がくる
 院長はメスの先きにも氣を配り
 肖像の院長外遊中の頃
 院長は下世話に犬の子を貰ひ

冷笑 同 同 同 同

兼題 息子

もう息子父の丈をば着て歩き
 灯がつく息子頭をなでつける
 いつ戻つたか息子寢てゐる
 洋服で來ると息子は嘘をつき
 逢ひにゆく息子へ犬がついてくる
 湯上りの息子へ電話がかつて來
 (軸)母方の伯父に息子の頼む事
 海水へ息子隣のの子を誘ひ

同 同 同 同 同 同

川柳雜誌社 加古川支部

九月四日

十公改 五彩果報

兼題 慾

慾望を満たすが爲めに辛い嘘
 慾のある間どうやら生きてゐる
 若しやと債券買つてみる
 カンフルにわずかに慾の喘いでゐる
 黄金に浸れど何か物足らず
 持參金氣質を褒める下心
 薄馬鹿に飾り氣のない慾を見る

泰山 同 同 同 同 同 同

兼題 夢中

叱らるるまでは夢中になつて居り
 甲子園暑さも何れも皆忘れ
 發車ベル消へてがつくり無駄を知
 めるい茶で筑碁は漸つて飯にする
 耳だけで意見を聞いてやせてゐる

同 同 同 同 同 同

一旦の若氣故郷を戀しがり 芳香子

かほる居偶會 (大阪)

八月廿五日夜

かほる報

猫

互

選

寅猫の飛びそこなつたトタン屋根
爪びきへだんく猫が丸くなり
母猫の瘦せた乳房に三四匹
猫捨てたその夜は夫婦寝もやらず
爪びきの音に仔猫は飛んで逃げ

幸松居偶會 (大阪)

松盛 琴人 報

燐

寸

一本もない燐寸箱へ腹を立て
燐寸貸して呉れ居残りしけて
貸す時にふつて見るマツチ
淋しさはマツチへ友の名なぞ書き
失せ物へ夕べの燐寸が散つたま

月二會例會 (尼崎)

九月一日

席題 格 氣

ほんやりさしてゐて格氣だけ強く
母親の格氣へ子供遠く居る
格氣するのはまだ早いぞと笑つて
舟世帯港港で格氣する

席題 虫

虫がなくもう母さんの一周忌
くつ虫ももうやすむぞこ戸をし
虫の聲いひ出しがれて話
不孝者今更の虫の聲をきき

二女 吟女 竹城 二水
二女 吟女 竹城 二水
二女 吟女 竹城 二水

虫の音を追ふて野末へきてしまひ
暮参り同じ虫の音きいて居る

兼題 枕

枕だけ上げて書寢の氣安うに
赤ん坊枕可愛く回んで
手枕もこの子のために忍びませう
寢つくまでの間を枕用を足し
氷枕をさつてもよいにほつさる
新聞と煙草が要る枕も
幸福は枕の並ぶ敷にみる
子の枕おさんの上に見當らず

名賀壽會例會 (尼崎)

八月二十六日於鹿白居

席題 近 所

互 選 報

近所でも譽められて居る律氣物
繼子には近所がよつて智恵をつけ
新聞で近所の事件やつさ知り
近所の手前何にも言はぬなり
近所は大事親類みな遠し
言はぬ事まで近所は知つて居る

席題 寢 言

互 選 報

寢言から女房は少し氣にし出し
不寝番は寢言の顔を見て通り
吾ながら寢言に夢の破られて
寢言にて師走さ言ふに笑ふて居
又寢言母は娘をたかじめめる
寢言なきいつ言ふたかさ今朝の顔
本氣かと思へばまた寝顔なり
一度聞きたくない妻の寢言なり

兼題 水 泳 眠 聲 選

水泳にオムラガラスは要らぬもの
女丈けにうまく海水服をぬぎ
競泳はやぶれかぶれと言つた風
口程に親海流の泳げず
危いと言ふが平氣で子は泳ぎ
ハツキリと區別をつける海水着
すき通るアールに合はぬ黒い色
(軸)背の皮をむいて水泳もどつて來

蒼梧舍例會

九月十五日 於第一生命大阪支部

兼題 新 築

互 選 報

新築の木の香が匂ふ飯の味
寫真まで添へて新築知らして來
新築のまだ床の間が落ちつかず
新築に寫真を好かぬ親父ある
新築に無沙汰の友へ案内状
新築の間ざり女中の部屋も入れ
新築で御内儀までが新しい
新築に標札だけがまだ出來ず
新築はいやが旦那に品がなし

兼題 日 曬 日

互 選 報

川柳雜誌社 川柳たかせ會 (鳥根縣) 九月八日 於幸水居 伊藤緑之助報

兼題 蜘蛛 緑之助 選 探し物こころで蜘蛛の巣を冠り 幸永

雷相 蟬の羽だけ蜘蛛の巣へ残る秋 雷相 (住月昇る頃を大蜘蛛網を張りつれよし

席題 忠告 雷相 忠告ももう孕ませた後のことつれよし

幸永 忠告もいづが捨てればならぬのか 幸永 (秀) 忠告がいつそ淋しい虫の聲 緑之助

席題 行水 幸選 足音が來て行水は向きを變へ 雷相 行水も故郷と違ふ金盥 緑之助 (秀) 三日月を賞めて行水拭き終り 同

席題 初秋の風景 緑之助 雷相 朝顔の只力なく二つ咲き 雷相 秋の來る鼻に色づく唐辛子つれよし

第拾回 川柳會 (天下茶屋) 九月拾日午後六時於天下茶屋集會所 南海至誠 竹内多聞 報

兼題 妹 貴山 妹の友も候補に母は入れ 貴山 妹のようにさ甘いことを言ひ 瓢箪樓

多聞 妹と立つて話せば女房の目多聞 連れてゐたのは妹やワヤにすな 同 妹もおありですかあらたまり 樂亭

樂亭 目的へ妹丈が共鳴し 樂亭 良妻になつた妹見違える 瓢箪樓 妹は焼芋實ひにやらされる 同

多聞 妻の妹日に美しくなつてゆき 瓢箪樓 友達に見付けられたは妹にし 靜石 不利さ見て妹母親呼んで來る 同 妹もモダンタイプに進んで來 同

席題 炭 路 炭屋から二軒目ですき教られ 靜石 消炭に似た生涯でありました 一杉 金策へたゞ炭ばかりたつてゐる 萬年青

樂亭 あかざれば炭を割るにもいそし 樂亭 炭消はた火鉢と見へぬ話し振り 同 奥の間の話氣になる櫻炭 同

同 炭取りを引寄せてから聽き直し 吞陽 切炭にマツチ十本使はされ 同 炭 焼を厭ひ都の出前持 同

同 (人) 言ひ兼ねて灰へ書いて 黒天子 (地) 暫らくは輕便炭の匂ひなり 萬年青 (天) 炭籠を背に廻してあらたまり 貴山

席題 吟 路 髪を梳く鏡へ天井斜なり 貴山 スカ死れる線路が長ら續いてゐ 同 ティーブルの上で女給は帯をさき 同

同 トンボ釣りの危篤は知らぬなり 樂亭 トラノクを聞いて香且師の聲に 一杉 席題 喰 逃 互

五輪 喰逃の首尾よくいつて舌をなめ 同 喰逃の置いた風呂敷砂が出る 同 喰逃げは下駄の緒のゆるいこ 同

同 喰逃げの食ふ丈け食つた憎らしさ 樂亭 貧故だ何喰逃の甘味からう 萬年青 喰逃は大きい事を話してゐ 靜石 喰逃をたくらむ程に太くなり 同

瓢箪樓 喰逃のやうにたゞ梅急いで出る 同 喰逃も天六らしい情景なり 同 喰逃は橋を渡つてホツトする 一杉 喰逃の氣付いて見れば傘がなし 同 喰逃の矢つ張り下駄に揃へさせ 多聞 喰逃の帯がゆるんで押はられ 同

同 喰逃げは氣付いたらしい聲をきき 同 喰逃げのある程はやつて欲しい 黒天子 喰逃げをして抜け路を一つ知り 大坊 喰逃のやうで悪いと引止めし 同

同 喰逃げにチト夕立の烈しすぎ 同 喰逃げのあさ一本に未練あり 同 喰逃のチツツもはつむ姿なり 同

川柳雜誌社 九月旬會 (神奈川縣) 平塚支部 十五日夜支部ニテ 駒人報

兼題 一度 駒人報 今一度おしへてくれこ子はせがみ 柳月 買け惜みもう一度ださ駒ならよ 香川 一度は引きつけられる女だら 城月

同 (佳) 今一度歸郷異郷の空に月を見 同 一度いか行かぬに小兒よくおぼは 同 今一度やらうさ買けは石を置き 同

席題 感心 士夫 顔 互 感心な子目の見ぬ父が 駒人 停電に工夫の顔はぬぞきこみ 柳月 一列車いきる間を工夫汗をふき 美知坊 仕舞つてく工夫に淋しい夕日なり 城月

同 失業の工夫へ不安な雲が見は 駒人 顔見れば今更逃るこさできす 香川 美しい顔にさわのよる日あり 城月 迷子の顔へされんくさより 駒人



編輯後記

▲路郎先生は八月十六日の夜漂然として羽越織の列車に乗り北海道へ旅立たれた。北海道では函館の龜井花童子氏の御好意に依り同氏の宅に滞在中諸所を見物されて、北海道の自然の美に打たれた或程度まで病苦をも忘れられたさうである。

▼二十日の朝 偶然來函された川上—太郎、川柳兩吉の兩氏に會はれ、渡島川柳社主催で同夜路郎三太郎兩先生の爲めに盛んな歓迎會並に歓迎宴が催されたさうです。

▼同夜先生が直ぐに歸られると思はれ、尾山夜半杖氏が遠く札幌から愛嬢を伴れて出席されたのに對し、非常に感激されたさうです。

▼又小樽では柳吟社の諸兄、氷原社の方々の好意で漫談に時を移し、驛まで特に見送つて頂き

無事に函館に歸られ、二十六日に函館を出發し、青森で喜田飯山、東京で岩崎柳路の兩君に會はれ、二十八日に歸阪されました。

▼路郎先生は北海道滞在中、龜井花童子氏の好意で札幌、小樽函館の三ヶ所を見物され、神尾三休氏と當別のトラビスト修道院を訪ひ、函館立待岬の共同墓地にある石川啄木の碑に詣でられるなど、短時間の間に諸所方々の見物が出来たことを非常に喜ばれ、東道の役を勤めて下さつた方々に感謝されておました。

▼なほ先生は印象の消へない間に何か旅行記を書きたいと言つて居られましたが、醫者に筆を持つことを嚴禁されてゐるので病氣が治つてからゆつくり書くつもりだと言つて居られます。

▼そして方々を旅行されたが、今度くらい愉快であり、且つ印象の深かつた旅行は無いと言つて居られました(平野記)

▼社友太田朝陽氏は八月廿七日飛行機で濱寺附近の上空を飛行されました。

▼高橋かほる氏は八月一日長女を目度く出産されました

▼廣島縣の瀬戸田で病氣を養ふて居た千代二君ひよこり九月一日にひるゝ居訪問、共に連れだつて「萬よし」にゆく。偶然三福氏と邂逅し一緒に路郎主幹を訪問せうと話して居るころへ主幹が珍らしく和服姿で來られ柳談に花が咲く、そこへ又山雨樓氏もみえて大いに賑ふ!「柴藤」で夕食を共にし一同愉快に別れたこの事

▼神戸支部では機關誌「かため」を臨時發行さして一號を發行されました。

▼高見柳骨氏は九月廿五日より三週間廣島電信隊へ復習に應召されました。

▼住田亂就氏維持社友さならる氏は若い作家として將來を矚目されてゐます。

▼平壤毎日新聞社文藝部では九月六日午後一時より西野觀月川柳大會を催されました

▼青森市のみちのく吟社、社友は八月廿九日板留温泉へ吟行

▼本社賛助員長崎柳秀氏令甥澤田清君關高の蹴球選手として意氣天を衝くの概ありしが九月上旬病に斃らる。病中川柳に親まれてゐたさうです、遺句は

▼川村桃鼓氏は本社のため多大の御盡力とされてゐられました

▼河村桃鼓氏は本社のため多大の御盡力とされてゐられました

▼入住其象代は榮ヶ池支部で其作家であつたが、八月廿九日自宅で永眠されました哀悼の意を表します

▼川村觀月氏の嚴父徳太郎(七二才)は郷里で七月廿七日永眠されました(柳予記)

▼藤原鳴玉氏の母堂こま女(五七)は六月十七日自宅で永眠されました(柳予記)

正誤

九月號募集句可明選「安靜を強いて看鶴婦病み續け」は漏み續けの誤植

移轉と改號

▼福田鶴峯氏は大阪市天王寺區住吉町道端二〇七九山下方へ
▼林仲享氏は大阪 西淀川區佃町四三二ノ一へ
▼六角風柳坊氏は桂風と改號
▼足立水鏡氏はミヤマードと改號

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に未記すること。

▼締切は嚴守されなす。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の郵紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募 集

第五卷第十二號課題

十月五日締切 (各題十句以内)

- ▼臺所 相元紋太選
- ▼藥局 佐々木三福選
- ▼暖炉 宮本銀砂子共選 庄萬よし

第六卷第一號課題

十一月五日締切 (各題十句以内)

- ▼年賀狀 蛭子省二選
- ▼港 橋本二柳子選
- ▼受附 岩崎柳路共選 安井ひろし

每號募集

- ▼近作柳樽(廿句迄) 麻生路郎選
- ▼古句質疑(三句迄) 蛭子省二擔當
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所に願ひます

定 價

普通號 一部 金參拾錢
 新春特輯號 一部 金五拾錢
 八月特輯號 一部 金四拾錢
 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共)參圓八拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます御不在中でも償ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和三年九月廿五日印刷

昭和三年十月一日發行

第五卷第十號 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪府西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸二郎

發行所 大阪府西成區千本通五丁目七番地 川柳雜誌社 振替大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

賣 擱 書 店

(大阪) 大賣擱 サクラヤ書房。(明文堂 其他市内各書店)
 (東京) 仲見世 玉森堂(神戸) 米田、後藤(願館)石塚
 (石川縣小松) マコト屋 (京都) 三宅

川柳雜誌社關係の人々

(いろは順)

賛助員

末弘 嚴太郎

客員

小出 楯重
木村 半文
柴谷 柴舟
篠原 春雨
蛭子 二魚
相森 東太
相元 紋太

高橋 かほる
高見 柳骨
竹内 多柳
矢野 冷刀
藤里 好古
喜井 駒人
北山 悟山
庄萬 よし郎

特別社友

維持社友

編輯局

(特別社友)

池澤 樂居
大澤 弘雄
岡本 平雄
片岡 直方
嘉納 純二
田中 辰涯
田中 香二
長崎 柳秀
國枝 史郎
藤本 卯之助
小井 清木
赤井 清司

岩崎 素柳
岩本 素柳
原史 風人
西田 三笑
德田 双柳
太田 朝陽
龜井 花童子
長谷川 一徹

兼田 柳一
本橋 白鷗
高橋 綠郎
谷村 稔
辻左 馬
中川 陽子
中澤 濁水
中見 光路
中島 鐵洲
中松 曼平
桑原 京郎
柳井 洲馬
楊井 洲馬
安西 三南
松西 杏三
安西 三南
越村 加香

青山 新水
朝田 黃彩
水田 峯美
水谷 峯美
嶋田 峯美
檜山 峯美
森田 峯美
住田 峯美
住田 峯美
住田 峯美

道頓堀支部 幹事 庄 萬よこ
大阪市北區北森町三十二
天満支部 幹事 北山 悟郎
大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七
濱寺支部 幹事 太田 朝陽
神戸市花隈町九六
神戸支部 幹事 楊井 二南
山口縣山口町石原小路
山口支部 幹事 柳川 洲馬
東京市芝濱松町一ノ十五建興商會
東京支部 幹事 岩崎 柳路
函館市青柳町五〇
函館支部 幹事 龜井 花童子
大阪市西成區粉濱中野町三丁目七二
住吉支部 幹事 徳田 双柳
朝鮮仁川仲町二丁目八
仁川支部 幹事 矢田 冷刀

松江市外川津野津方
松江支部 幹事 松丘 町二
石川縣小松町楢橋詰
小松支部 幹事 木田 柳一路
高知市本與力町
高知支部 幹事 中澤 濁水
大阪市西淀川區姫島町五二一
姫島支部 幹事 横田 眠聲
大阪府外阪急沿線刀根山療養所内
盤ヶ池支部 幹事 安西 杏三
金澤市八幡町五三
金澤支部 幹事 中川 眼隠子
大阪市東區糸屋町二丁目七
糸屋町支部 幹事 川合 舟々
和歌山縣田邊町幽松松下
田邊支部 幹事 辻 左馬
島根縣簸川郡今市町本町
簸川支部 幹事 森田 笑太郎
豊橋市旭町
豊橋支部 幹事 高橋 緑郎
神奈川縣平塚町旭座前
平塚支部 幹事 酒井 駒人
兵庫縣加古川町大川町
加古川支部 幹事 水田 黄彩
青森市古川町美法二七
青森支部 幹事 喜田 飯山
京都市七條大宮東入
京都支部 幹事 桑原 京郎
山口縣防府町宮市八王子町
山口支部 幹事 兼重 白鷗
富岡支部 幹事 兼重 白鷗
鳥取市川端町一丁目
鳥取支部 幹事 中島 鐵洲
大阪市東區北濱一丁目益武鹿方
北濱支部 幹事 谷村 稔

清 酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて来る



灘 津 攝

嘉納合名社會釀

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから新刊が出るに新刊を一々破損することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ／＼讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こゝうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことばかり。

(路那生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本 全一冊

定價 五十錢 郵税 二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリ合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

田中五呂八著

最新刊

新興川柳論

四六版上製
紙數百四十頁
價壹圓貳拾錢
郵送料拾錢

主要項目

平凡な我等の黎明、傳統から創造へ、川柳史を書換へよ。詩の普遍性と個性、詩と思想、新興川柳の使命を論ず（傳統俳句觀、新傾向俳句觀、傳統川柳觀、新興川柳觀）鑑賞上の諸問題（藝術と鑑賞、作家と選者の關係）病める者の二元相、川上日車氏の藝術（既成要素の深化、心理描寫、ユーモア、思索的な句・新感覺の創造、生命的な作品）新興川柳への序曲、藤井小鼓君を憶ふ、東京柳壇批判（村田綱坊氏の妄言、矢野きん坊氏の革新禮讚、阪井久長岐氏の漫談、新星會一派に與ふ、川上三太郎氏の革新運動、中央柳壇の没落と黎明）心の住む時間層、木村半文錢氏の作品、この現代心を見よ（岸本水府氏を通じて語る）森田一二論、定形律の優越性、白石維想樓論、新興川柳詩集の地位、思索的新興川柳、社會主義藝術批判（森田一二氏へ答ふ）井上劍花坊論、プロレ文學は成立するか、先驅する人々、唯物史觀的藝術論を駁す（森田氏への回答）其他

各地の同志によつて川柳革新が提唱されてから、既に七年になるが、今や柳壇は明らかに二分野を劃し、全國に亘つて新興川柳の普及を見るやうになつた。この間に處して常に倦まず、第一線の苦闘を経て來た著者が、大正十二年二月以來の主要論文を一卷に收めて世に問はんとするのが本書の使命である。その意味で本書の内容は、横に觀るさき一幅の柳壇闘争史であり、縦に見直して新興川柳の發達史でもあるから、新興川柳の眞髓に觸れんとする人、新興柳壇歴史的發展を知らんとする人々にまつては、正に欠くべからざる座右の研究書である。

振七 小五 替八

氷原社

小東 橋一 稻七 總町

發行所

近藤飴ン坊著 宮尾しげを装幀

四六横綴 上製函人 定價壹圓參拾錢 郵送料 拾錢

川柳女性壹萬句

◇川柳は面白いが、意味のわからない句があるので困る！と嘆じてゐる方へ本書をお薦め致します。本書は読んでゆ

◇初めて川柳を作る方へ本書を御薦め致します。著者飴ン坊先生は初心者誘導に就ては川柳界第一人者です。本書は

◇女性研究家に本書を御薦め致します。本書は有らゆる女性を禮讀し批評し同情し説諭し訓戒するに川柳的觀察を以

◇すべての階級の婦人に本書を御薦め致します。本書は女性禮讀の句集であります。婦人向上の参考書で本書は一讀

◇多笑の間に婦人の進むべき道、守るべき道を教へてゐます。廣告に川柳應用は現代流行の大勢であります。本書には廣告應用の川柳が滿

◇本書を廣告意匠家に御薦め致します。婦人の心理をつかめる川柳が何れのものにもあります。本書は吟友諸兄の名吟を集めて美装を凝らして世の中へ生れ出たものです。吟

◇本書の内容に就ては出版趣意書あり、御一報次第郵送す。本書の扉に著者の出版記念句をサイン御希望の方は御註文の際其旨附記して下さい。

岡田三寛政改革と柳樽の改版 四六判 定價貳圓五拾錢 布裝 送料 拾八錢

同 川上三新川柳壹萬句集 四六判 定價壹圓五拾錢 紙裝 送料 拾錢

同 川柳滑稽句集 四六判 定價九拾錢 紙裝 送料 拾錢

同 川柳日本俗説史 四六判 定價壹圓參拾錢 布裝 送料 拾八錢

發行所 東京市橋本區鐵砲町六番地 磯部甲陽堂

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

漫書三十二葉・四六版・美裝・函入

川柳 累卵の遊び

定價 壹圓 (送料拾錢)

實に氣持のいい本だぞ云はれてゐますのでよこんでゐます。皮肉で面白いのでよく贈物になります。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。(腹乃)

川柳とは何ぞや——の數萬言を聴くよりも本書を緋け！實に愉快に而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

内容概目

川柳 累卵の遊び
日月は輝く
大衆と共に
麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博したる川柳漫書漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により収録したるもの——。
「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの——。
「講談俱樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしたるもの——。

不朽洞製 句帖

(近く發賣)

- ▲ふき湧出づる句境を適さぬため絶わす此の句帖を懐ろにしてゐて下さい。
- ▲自分の句、先輩の句、又は古人の句を書抜くためにも好適の句帖です。
- ▲定價金四拾五錢 送料金六錢

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 (毎月一冊一日發行)
昭和三年九月二十五日印刷
昭和三年十一月一日發行

川柳雜誌

(第五十七號)

定價 三拾錢

大阪西區千本通五番五
振替大阪五二五八五番

發行所 不朽洞